
BUSY

ずんだもち大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B U S Y

【Nコード】

N 3 6 3 8 S

【作者名】

ずんだもち大好き

【あらすじ】

俺の名前は多日咲賢治^{たかさきけんじ} 16歳

ごく普通の高校、春緒^{はるお}高校に通う高校1年生

好きな食べ物はみかん、嫌いな食べ物はきゅうり

趣味は音楽鑑賞、特技はペン回し

得意科目は数学、苦手科目は英語

尊敬する人は坂本竜馬

日課は毎朝6時に起きて勉強すること

といったような感じのいたって普通の人間だ

でもって俺には一人の幼馴染がいる
性別は女、黒髪ロングで顔だってなかなか可愛いしスタイルだって
良い

確か中学の時学年の可愛い子ランキングみたいなので1位をとった
ことがあったと思う

そんな俺の自慢できるはずの幼馴染

ただ俺はその幼馴染を一度も自慢したことはない
何故かって？

それはこれからのお話を見れば分かる

一人の男と一人の女を中心に繰り広げられる

笑いあり！イライラあり！！ちよつと感動あり？のハイテンション
ラブ？？コメディ！！

俺VS長田彩華のテスト対決

眩しい程に晴れ渡る空

何故こんな良い天気の日教室で授業を受けなければいけないのだろ
うか

こんな日には外でサッカーやら野球やらをしたいものだ

いやごめん今結構かつこつけました…

正直言うと俺そんなに得意じゃないんだよね…

というわけで悪いのだが今俺が言ったセリフの“サッカーやら野球
やら”のところを“鬼ごっこやらかくれんぼやら”に換えてもう一
度読んでくれ

ただ勘違いしないでほしい

別に俺は運動音痴というわけではない

そういうスポーツが苦手というだけで足の速さや水泳などにはな
なか自信がある

まあ機会があれば見せてやるよ

とまあ昼休みである現在、俺は高校の教室の一番窓際の一番後ろに
ある自分の席に座って机に頭をのせて窓から空を眺めながら脳内で
語っているのだが…

さつきから俺の後頭部に何か小さくて柔らかいものがぺしぺし当た
ってくる…

「なんだこれ？鼻くそか？」

「違うわバカ、けしカスに決まってるでしょ」

「あー鼻くそじゃなくってよかったー。んでなんでお前は俺の後頭
部にぺしぺしけしカスをぶつけてくるんだ？」

「知らないの？けしゴムをこするとけしカスがでるのよ？」

「理由になつてない!!!」

とまあこちらの俺にけしかスをぶつけてきている右隣りの席に座っている女の名前は長田彩華^{おさださいか}

正真正銘紛れもなく俺の幼馴染である…

「けしかスのことと賢治の人生なんてどうでもいいのよ、そんなことよりよくそんなにボケーっとしてられるわね」

「俺の人生はどうでもよくねえよ!!! んでそれどういう意味だよ」

「来週から試験だつて言うのによくそんなに余裕ぶっこいでいられるわねって言つてんのよ」

「あーそんなことが、俺は家でちゃんと勉強するから大丈夫だよ」

「へっ、そういう奴は決まって勉強始めて30分後ぐらいに『あゝもうやってらんねーぜ、大体なんでテストなんてあんの? まじ世界で一番最初にテスト考えたやつ豆腐の角に頭ぶつけたことによるシヨックで死ぬ』とかつて言うのよ」

「結果的にシヨック死!? てかそんなこと言う奴いねえだろ…」

「まあそんなわけで次の試験は私の勝ちよ、うまい棒は私がいただくわ」

「うまい棒?」

「何? 忘れたの? 負けた方が勝った方にうまい棒1000本おごるっていう約束したじゃない」

「そんな約束した覚えはない！しかもそんなにいらねえだろ！！！！
！それじゃあ負けても勝つてもバツゲームじゃねえか！」

「何それ？私がうまい棒大好きなこと知っててけんか売ってんの？」

「分かった分かった！分かったから机の中から変な緑色の液体出す
のやめてくれ！！」

とまあそんなこんなで彩華と意味不明ってか俺にはなんのメリット
もない契約をしてしまった…

てかこいつそんなにうまい棒好きだったのかよ…

ただまあもちろん俺だってうまい棒なんかに1万円を使う気などさ
らさらない

自分で言うのもなんだが

俺は勉強が比較的得意だ

あらずじを見てもらえば分かるが俺は毎朝6時に起きて勉強をする
ことが日課になっている

しかもそれは入学してから今まで欠かしたことは一度もない！！

もちろん朝だけではなく夜もちゃんと勉強しているし休み時間はボ
ーっとしてるかもしれないが授業中だってまじめに授業を受けている

まあ彩華がどんぐらい勉強しているのかも分からんから油断はでき
ないが…

俺には勝てる自信がある！！！！

まあせいぜい彩華にうまい棒1000本プレゼントしてもらおうじ
ゃないか！！

てなわけで時間は過ぎ現在午後7時（自宅の俺の部屋）

そろそろ勉強を始めるか

つと俺が乗り気になった直後に俺のケータイがブーブー言いやがった
開いて見てみると画面には長田彩華と書いてある

しかもメールではなく電話だ

「ん？何だ？早くも降参か？」

「んなわけないでしょバカ、賢治ん家のドアノブあのときみたいに
全部ぶっ壊すわよ」

「あのときつてどのとき！？てか俺んちドアノブ全部壊されたこと
あんの！？…んで何の用だよ？」

「いやーあんたがもうギブアップしてるかどうか確認したくてねー」

「残念ながら俺は今から勉強を始めるところだよ」

「あら奇遇ね、実は私も今から勉強を始めるところだったのよ、そ
れじゃああんたがうまい棒を恥ずかしそうに1000本買うところ
を想像しながら勉強するとしますか、それじゃあさようならこのク
…」

電話を切られた…

てかあいつ最後絶対俺をクズ呼ばわりしようとしただろ！！

まあいいや…

勉強始めよう…

・・・それから30分後・・・

また俺のケータイがブーブー言い始めた
開いて見てみると

まあ当たり前長田彩華と書いてある…

「へっ、残念ながら俺はギブアップしてねえぜ？それどころかはかどつてきてるわ」

「あっそう、それはよかったわねー、はーあ…」

ん？なんか様子がおかしいぞ…

「お、おいどうした？」

「あゝもうやってらんないわ、

大体なんでテストなんてあんの？まじ世界で一番最初にテスト考えたやつ豆腐の角に頭ぶつけたことによるショックで死ね」

「あんだけ言つといて自分がギブアップしとるやんけえ！！！！！」

…でまあここからは後日談になるのだが

結局それから彩華の勉強に対してのやる気は全然なくなってしまい結果としては俺が学年16位で彩華が学年127位という

俺が凄い差をつけて勝利するという形になった

んで肝心な（あんま肝心ではないけど…）うまい棒1000本だけど…

まあきつちりいただきましたよ…

はあ…どうせならうまい棒じゃなくて買う前の代金1万円が欲しかったぜ…

英語の宮本先生が牛肉を買った理由

はい、ということでも多日咲賢治です

現在の俺の状況を簡単に説明しますと

学校から一旦家に帰宅したものの明日小テストがある英語の教科書をちやうど忘れてしまい学校に戻っているところです

いつてもうちから学校までは徒歩5分でそんなに苦にはならないから別にいいんだけどね

てなわけで学校到着

普通のマンガやら小説だったらこの徒歩5分という間でもいろいろあるんだろうが

この作品では一切ありませんので期待はしないでくれ

とまあそんな感じですよーっと我が教室に入るところには一人の女性が自分の席に座って何かをやっている

はい、長田彩華さんです

「一人で何やってんだお前？」

すると彩華はすんげえめんどくさそうにこっちを向く

「今日日直だったのよ、だから今から日誌を職員室に持っていかなくちゃいけないの」

「へえそつか…、んじゃ…」

その瞬間彩華は机の中から見覚えのある緑色…あれなんか前より色が濃くなってるような…

液体を机の中から出し始めた…

「分かった分かった！分かったから机の中からその変な濃い緑色の液体を出すのをやめてくれ！！」

「分かればよろしい」

「つーか日誌なんてそんな薄っぺらくて軽いんだからお前一人で十分だろ？」

「確かに十分よ、こんなの小指一本で持てるわ、ただ賢治が何も心遣いをせずに平然と帰ろうとするのが超むかついから賢治が嫌がることをさせようと思ったのよ」

「お前どんだけ黒いんだよ！！そういうのは普通思っても口に出さねんだよ！」

「うるさいわねえ、ごちゃごちゃ言ってるさっきの液体頭皮に塗りつけるわよ」

「さっきの液体そうやって使うの！？…まったくこっちはあまってるうまい棒処理しなきゃいけないってのによお…（詳しくは1話でどうぞ）」

てなわけで俺と彩華は職員室に行くことになったわけである
と廊下に出た瞬間見覚えのある人が前から歩いてくる

「あ、こんにちは宮本先生」

はい説明しましょう

今出てきた宮本先生というのは我々1学年の英語を担当している教師
4組の担任でもある（ちなみに俺たちは1組）

年齢は31歳、未婚、好きな芸能人は北川景子

というまあ普通っちゃ普通の先生だ

あとちなみにさっきあいさつしたのは俺じゃなくて彩華ね

「長田さんそれと多日咲くんこんにちは、日直のお仕事ですか？」

「仕事っていつか今から職員室に日誌を届けに行くところですよ、あっそういえば私昨日先生がスーパーで牛肉と豚肉どっちを買ったのって目撃しましたよ」

「それはそれは恥ずかしいところを見せてしまいましたねえ」

「いえいえ、私も特に興味…いや全然興味なか…いや本当は見たくもなかったんですけど我慢して見てました、結局どっちにしたんですか？」

「その我慢必要ねえだろ…」

「てか普通そんなこと本人前にして言うかよ…」

「こいつの腹黒は教師だろうが関係ないんだな…」

「ちょっと高かったですが牛肉にしました」

「先生気にしてねえな…」

「最終的な決めてはなんだったんですか？」

「こいつすげー聞くな…」

「普通牛か豚かの話でここまで話題膨らまないだろ…」

「やはりたまには肉が食べたくて」

「ん??」

「そうですね肉食べたいですよ、それではそろそろ失礼します」

んで先生は彩華と俺に『はい、さようなら』というとすたすた歩いてその場から去って行った…

「なあ俺今の話理解できなかったんだけどさあ、豚肉だって肉だよな？」

「当たり前じゃない、そんなこともわからなくなってしまったなんて賢治久しぶりに精神科に行ったほうがいいんじゃない？」

「うるさい！！本気の眼で俺を見るなあ！！しかも俺がなんですでに精神科に通つてるということになってんだよ！つというのとはさておき…、俺が聞いているのはなんで宮本先生は豚肉を肉だと思つてないのかってことだよ」

「だって豚を肉だと思つたら自分も店に売られることになつちゃうでしょ」

「お前今あつさり宮本先生のこと豚扱いしたぞ！！確かに見た目は太つてて牛か豚かと聞かれたら迷わず豚！！と答えるけどあの人は真正銘紛れもなく人間だ！！店に並べられるなんて絶対にありえない！！」

さつき説明するのを忘れていたが宮本先生はなかなか…かなりの巨漢なのである…

「違うわよ、あれは豚の皮を被つた人間…いや人の皮を被つた豚…いや牛の皮を被つた豚よ」

「一番最悪なものになつたあ！！！！てか人の皮を被つた豚以外皮被る意味ねえ！！」

「やはりそうなんですネ…」

「「あ…」」

はい、俺たち二人で啞然…

はい、これはやばいことになりましたあ！

どんぐらいやばいかつていうとコンビニで買い物してて自分の後ろにヤンキー３人ぐらい並んで最終的に１円足らなくて『お金足りないので返品で…』っていう時ぐらいやばい！！（これ言うほどそんなにやばくないです…）

はいそうです

まさかの宮本先生再登場

「ぜ、全部…聞こえてました…？」

「ええ、そこに隠れていたんで全部聞いていました…」

「さっきのは宮本さんというまた違う人の話で…」

「隠さないでいいですよ…」

ヤバッ！

宮本先生めちやくちや顔暗くなってるよ…

ここはとりあえず何か褒めて機嫌を…

「なら遠慮なく言わせていただきますと、先生は１年特に女子の約８割の子に裏でポーク宮本と呼ばれてますちなみにこのあだ名を考えたのは私です、実は入学式の頃からなんとなくあだ名は考えていたんです、さらに実はポーク宮本は２作目のあだ名なんです、記念すべき１作目は何だと思えます？気になりますよねえ？特別教えてあげます、記念すべき１作目はポ…」

「やめーい！！お前それは言い過ぎだぞ！！しかもあだ名考えたの
お前かよー！！！」

「はっ？何言ってるのよ自分だつてさつき『まじ宮本つて豚そつくりだよな、ホント毎日見ると豚肉が食べたくなくなるぜーウツキャツキャツキャツキャー！！！！』」って言つてたじゃない、私一人に罪をなすりつけるなんてあなた相当の腹黒ね」

「お前に言われたくねえよ！！しかも俺はそんなこと一言も言っていない！！！」

「多日咲くんは私のことをそんな風に思つてたんですね…」

「だから言つてないですつて！！！てか俺より彩華の方が酷いこと言ってるでしょーに！！！」

「誰が一番悪いとかそういうの無しにしようよ、もう私たち高校生でしょ？」

こいつうつうつ！！！！！！！！！！
女じゃなけりゃあぶん殴つてやるのにいいいい！！！！！！

「もういいですよ…私にはどうせ何一つ良いところがないんですから…」

やばい！！

ここはもう褒めまくらないと
先生自殺しかねない！！

「先生にだって良いところたくさんあるじゃないですか！！！！俺は

知ってますよ先生の良いところ！」

「ほんとですか？私の良いところってどこですか？？」

「はい！先生の良いところは…」

ああやべえ…

全然良いところ思いつかねえ…

もう適当になんか！！

「あれです！あの…先生が英文読むときめちやくちや噛むところとかおもしろくて好きです！！」

「それってぶつちやつけ汚点じゃない？」

「じゃ、じゃあ…あの…たまに先生英語でギャグやるじゃないですか！あれとかめつちやおもしろいです！！」

「私はどっちかって言うとそのギャグを生徒が全然理解出来なくて全員がポカーンってなるときの空気感の方が切な過ぎて逆に笑える」

「……………」

うわー

彩華の野郎全部ぶつ壊しやがった…（まあどっちにしろ褒め言葉になっただけから意味ないけど…）

「なんか逆にはっきり言ってもらえてすっきりしました…明日は小テストなのでしっかり勉強しといてくださいね…それでは…」

トボトボとその場を立ち去る先生の後ろ姿は非常にちっちゃく見え
た…

と見えなくなる手前でこの場にいる一人の人間が口を開く…

「あの、先生？」

まあ言うまでもなく彩華である

「はい、なんでしょう…？」

「ダイエットって知ってます？？」

「「……………」」

…てなわけでここからは後日談になるのだが

次の日から宮本先生の通勤手段は車から自転車になった

そして弁当の具8割が野菜になり

毎日昼休みはグラウンドを10周走ってる

何やら彩華がコーチになってスパルタ指導しているらしく

三日で3キロ痩せたらしい

まあなんだかんだ楽しくやってるようだ

ただ何故か俺の小テストだけ激ムズになっていた…

何はともあれ今回はなかなかのグットエンドだったのではないかと
思う

ただ宮本先生が豚を肉と思ってなかった真の理由については今だに
分かっていない…

P S、ちなみに1000本あったうまい棒は家族で必死に食べた甲
斐あつてか残り100本をやったときりました。

俺んちの玄関のドアノブになにか硬いもので殴ったような跡がある

はいどうも多日咲賢治です

はい今回はぶっちゃけ前回と時系列はあまり変わってないです
簡単に説明すると

前回（2話の本編）よりは後だけど後日談よりは前の話ってことになります

まあ細かいことは気にしなくても分かるようになってるから

分かんなくなったらスルーで純粹にこの話を楽しんでください

そんなわけで現在はごたごた後の夜11時

いつもならこの時間はもう寝ているのだが

今日はあることをしなくてはならない為この時間まで起きているのだ
まああることといっても

ただ単にあの後宮本先生に何故か明日までの課題を出されてしまっ

ただ、た
たというだけなんだけど……

はーあ…

何か俺宮本先生に嫌われてる気がする……

俺別に宮本先生の悪口なんも言っていないのになあ…（いや、言ってます…しかも結構酷いこと言ってます…）

まあいいや……

よし、始めよう！！

と思った直後にケータイがブーブー喚きやがる

誰だよ！

タイミング悪すぎだろ！

でまあケータイの画面を見てみるとそこには

長田彩華と出ていた…

「またおまえかよ!!!!!!!!!!!!!!」

「電話に出るなり何よ」

「それはこっちのセリフじゃ！！なんでいつも俺が勉強を始めるタイミングに電話してくんだよ！！」

「まあまあ落ち着いて、落ち着くために一つクイズを出してあげるわ、では第1問、人間の体にある一番臭い穴はどーこだ？」

「ええとねー裏をかいて耳の穴かな？ってんなことやってる暇こっちはねーんだよ！！！！！！」

「何よせっかく可愛く問題出してあげたのに」

「おまえのやる行動は一つ一つに悪意を感じるから可愛いとか全然おもえんわ……」

「あらそうですか、まあ確かにそれで賢治に『萌えええええ！！！！』なんて言われても全然うれしくないわ、それどころが三億年間吐き気が続いてしまうわよ」

「お前何年生きるつもりだよ！！！！……まあとにかく俺はお前ほど暇じゃないの、んじゃ電話切るぞ」

「暇じゃないってようするに宮本先生から出された課題をやらなきゃいけないってこと？」

「そうだよ分かってんなら電話掛けてくんなよ……」

「その課題なら私も貰ったわよ」

「まじでえ！！！！！！！！！！」

きたああああ！

ちゃんと宮本先生俺だけじゃなくて彩華にも課題出してたんだあ！
良かった俺が嫌いだから課題出したわけじゃないのかあ
ふゝ安心安心

「ええ、英語のプリント1枚でしょ？」

「俺2枚なんですけどおおお！！！！！」

「あららららららら、賢治宮本先生に嫌われてるんじゃない？
いたい何したの？」

「恐らくお前のせいだよ！！！！！！！」

「まあそんなゴミみたいなことは置いといて、今から賢治ちゃんの
家に行ってもいいかしらん？」

「置くな！！そしてキャラを固定しろ！！……んでこんな夜遅くじゃ
無理だよ、親も弟も寝てるし」

「なら今からうちに来なさい、うちなら誰もいないし」

「あのなあ……俺は場所よりも時間のことを言ってるんだよ」

「何？若い女子一人の家にむさくるしい腐ったくさやみたい俺が
入ったら家がどんどん風化して崩れてしまつかもっていうことを気
にしているの？それなら大丈夫よ、うちは腐ったくさや人間対策はば
つちりだから」

「誰もそんなことは言っていない！！！！！！しかも腐ったくさやって

何だよ！！全然想像つかんわ！！あと腐ったくさや人間対策ってなん…」

「ああもうツツコミが長くて聞いてんのうざったいからもういいよ、んで無理なのね！分かったわ！じゃあね！このクズ！！」

電話を切られた…

しかも今度はちゃんとクズがフルで入ってるし…

しかもツツコミは否定されるし…

しかもなんか腐ったくさやとかいう意味分からん物に例えられるし…

まあいいや

とりあえずプリントを終わらせよう

よし！

今度こそやるぞっ！！

つてときにまたケータイがブーブー喚き始める…

心なしかこのケータイのバイブ音も彩華による悪口に聞こえてくる…

「おきまりかっ！！！！！！！！」

「あら、鬱陶しがるわりにはちゃんと電話にでるのね」

「うるせえ！！用がないなら掛けるな！！」

「明日、いやもう今日ね、の朝5時に賢治の家にプリントの答え写さしてもらいに行くから起きてちゃんと準備しておきなさい、準備出来てなかったら賢治の家の風呂が赤く染まり最終的には緑色になるわよ」

「あ？？何言ってるのおま…」

電話を切られた…

……

……

「もうなんなの！！！！！！」

てなわけで朝

正直自分の課題終わらすのに2時までかかってしまったから
ぶっちゃけ俺はほぼ無睡眠…

もう少しでも寝ようと思ったけど

彩華はきつちり5時00分00秒丁度に俺んちのチャイム鳴らして
上がり込んでくるし

写し終わったら終わったで今度は小テストの勉強教えさせられるしで
結局寝れませんでした…

こんなんでも小テスト大丈夫かや…

「何賢治小テストのこと心配してんの？それなら心配いらないわよ、
宮本先生問題簡単にするって言ってたわ」

「まじでえ！！」

助かったー

俺元々英語苦手だしぶっちゃけ万全の状態でも合格点いくか心配だ
つたんだよねえ

「何アホ面してんのよ？行かないならおいてくわよ」

「お前は一言余計なんだよ！」

でもって登校途中

まあ前日も話したけどうちから学校までは徒歩五分なので

新しい出会いやなんかはほとんどないんだが
今日は珍しく出会いがあった
まあ新しくはないけど…

「お、おはようございます宮本先生…、今日は自転車なんですね」

「おはようございます多日咲くん、長田さん、そうなんです、やっぱり自分を変えるには自分で努力するしかないと思いましたので」

「つてことは先生ダイエットすることにしたのか

良かった

自殺とかしてなくて…

「そういえば先生？今日の小テストは簡単な問題にしてくださいさるんですよね？」

「はいそうですよ」

「よっしゃー！！！！」

「……くん意外はね…」

あれ？今先生なんか言った…？

「まあとりあえず2時間目を楽しみますよ、それではお先に失礼します」

と先生がチャリをこぎ始めようとしたとき
突然彩華が口を開いた

「ところで先生？今日の昼休みもいつも通りダラーンと太ったナマケモノみたいに過ごすんですか？」

「え、ええ、まあそうする予定ですが」

宮本先生認めちゃったよ…

「それじゃあ昼休みになったらジャージに着替えてタオル持ってラニングシューズ履いてグラウンドに来てください」

「な、何をするんですか…？」

「スパルタダイエットです、来なかったり弱音を吐いたりしたら先生のあだ名ブタゴリラ（ブタ9割ゴリラ1割）になりますから、それでは」

「…は、は、は、はい！..」

「先生おびえさすなよ…」

とまあこんな感じに先生との会話を終え俺たちも再び学校に向かい始めた

そこからまたさらに時間は経過し

現在小テストがある英語の授業中

ただまあなんていうか

小テスト用紙が配られると同時に分かったことがある

それは宮本先生が俺のことを嫌いだと言うことだ…

何故そう思うのかって？

そんなの簡単だよ

なぜなら

俺の小テストの問題だけ明らかに難しすぎるからである…

勘違いしないでいただきたいのは

俺は別に他の人のテスト用紙を見たから自分のテストだけおかしい
ということが分かったわけではない

ただ単に俺のテスト用紙だけ色が違うのだ…

しかも周りのみんなめっちゃスラストラ問題解いてるし…

え？なんでそのことを先生に言わないのかって？

言ったさ！

何度も何度も声が枯れるぐらいまで先生のことを呼んださ！

なのに先生は俺のことをガン無視するのさ！

あれくのはてにはクラス委員に『ちよつと多日咲くん静かにしてよ
！！テスト中よ！！』てか先生が無視してんだからいい加減諦めなさ
いよ！！！！』って言われるし…

はあ…

まあ分かんない問題を考えても仕方ねえな…

あきらめるかあ…

「言い忘れていましたが万が一0点を取ったりなんかしたら、そうですね…、次の英語の授業のとき一発芸をしてもらいますからね、まあ問題が小学生でも分かるレベルなので一問も分からない人なんていないと思いますけど」

ちよつとまでーい！！！！

何この人勝手なルール作ってんだよ！！

てか小学生でも分かるレベルのテストする意味ねえだろ！！

そこ指摘しろよクラス委員！！！！

もういいわ！

この際一発芸だろうが何だろうがやってやるよ！！

「じゃあわたくし長田彩華はその一発芸をやる人の名前が万が一」

た」ではじまり「じ」で終わる人だった場合、その人んちの全てのドアノブを跡形もなく粉碎することにします、まあそんなこと絶対ないとは思いますが」

「……………」

ドアノブが人質にとられたあああああ！！！！！！！！！！

てなわけでここからは後日談

まあ結論から言いますと

俺は一発芸をしてません

理由は簡単

俺が0点を取らなかったからだ

なんと奇跡的に一問答えが当たっていたのだ！

テスト返すときの宮本先生の悔しそうな顔ったらなかったぜ！

そんなわけで自分で言うのもなんだが今回もなかなかのグッドエン

ドだったのではないかと思う

まあただ一つ悪かったことと言えば

うちの玄関のドアノブになにか硬いもので殴ったような跡があった

ことぐらいかな…

はあ

このことをあいつに言ってもどうせ『玄関だけで勘弁してあげたんだからありがたく思いなさい』とかって言われるんだろうな…

いつもと少し違うある朝の「」マ

「そついやお前が前言ってたクイズの答え聞いてなかったな（詳しくは3話でどうぞ）」

「ああそついえばそうね、あのクイズの答え気になるの？」

「まあな、んで答えは何なんだよ」

「答えは大きい方をした直後のケツの穴よ」

「それ当たり前じゃねえか！！！！てか女子がケツの穴とか普通に言うな！！」

「当たり前で何が悪いのよ、当たり前のことを当たり前に言える人ほどすごい人はいないって良く偉い人が言うじゃない」

「それは当たり前前のことを当たり前に“できる”人ほどすごい人はいないの間違いだ！てか当たり前のことを当たり前に言われるだけじゃなんも感じねえだろ！！」

「なら賢治は私に当たり前じゃないことを当たり前に言えっていうの？」

「だから誰もそんなこと言ってねえだろ！！」

現在は6時で朝のホームルーム前の時間帯

自分たち以外誰もいない教室で会話をしているのは言うまでもなく

多日咲賢治という一人の男と

長田彩華という一人の女である

お互いなんとなく早く学校に来てしまい

結局やることもなく

なんとなく雑談をしている

これはそんな二人の朝の一コマである

「お前と会話するときはホント体力使うわ…、でもお前容姿だけは良いのに誰かに告白されたりしないのか？」

「容姿だけはって…、喧嘩売ってんの？焼き殺すわよ」

「どうやって焼き殺すんだよ…」

「知らないの？私の右目は睨みつけるだけで相手を発火させることができるのよ」

「そんなサ。ケの。照みたいなこと出来るわけねえだろ！！ってかお前マンガとか読むんだな」

「当たり前じゃない、もう読みまくりの破りまくりよ」

「そこ読むだけにしとけよ！！」

「ちなみに中学のときはキャ。テン翼に憧れて女子サッカー部に入ってたわ」

「お前のサッカー部に入った理由。ヤプテン翼！？」

「さらにの。めに憧れて吹奏楽部にも入ってたわ」

「。だめって…、そういやお前部活掛け持ちしてたんだっけ」

「そうよ、それでも春緒中の黄色い閃光ってよばれていたんだから」

「ちよいちよいN。R。Tネタを持つてくるな!!」

「そういえば賢治は中学のときも部活無所属だったわね」

「まあな、なんか部活としてスポーツをするのが嫌だったんだよ」

「ふーん、私は賢治の存在が嫌だけどね、…んでなんだっけ告白のはなしだっけ？」

「お前って人を傷つけるのホントうまいな…」

「告白だったらめちやくちやされるわよ、毎日朝昼晩計3回告白されるわ」

「飲み薬の説明みたいに言うな!んでまあそうだとして、お前どうやってその相手を振ってきたんだ？」

「振る?悪いけど私は告白してきた人を振ったことなんて一度もないわよ」

「え!まじで?じゃあなんで彼氏いないんだよ、もしかして俺が知らないだけでお前彼氏いるのか？」

「そんなわけないでしょ、私と付き合うに当たったの条件とルールを言つと相手から逃げていくのよ」

「お前どんな過酷な条件つきつけてんだよ！」

「誰にでもできることよ、例えば毎朝おはようのチュウを私の靴にしたり、私が指を鳴らしたら即出てきたり、私に対しては絶対忠誠を誓ったり、それから」

「それもう彼氏じゃなくて奴隷だろ！！」

「え？彼氏と書いて（どれい）と読むんじゃないの？」

「もう一度言うがあんた黒過ぎや！！全く相手は勇氣出して告白してるのにそんな感じであしらわれるなんてホントかわいそうだな」

「そうかしら？私にあしらってもらえて喜んでるんじゃない？」

「お前に告白した奴全員をドM扱いするな！っーかお前彼氏作る気絶対ねえだろ！」

「そ、そんなことないわよ！、私だって告白してほしい人に告白されたら素直にOK出すわよ…」

「え？告白してほしい人？？」

「ああもう、なんでもないわ」

「なんだよ隠すなよ！告白してほしい人って誰なんだよ！」

「うるさい」

「なんでだよ！教えるよ！減るもんじゃねえし良いだろ」

「うつさいわねえ！それ以上聞いたら本気で開眼するわよ！」

「まだそのネタ引つ張んのかよ…」

「とりあえずさっき言ったことは全部忘れなさい」

そう言つと何故か長田彩華は顔を手で隠しながら後ろを向いた

「忘れられるわけな…ってなんでお前手で顔を隠しながらそっち向くんだよ」

「んじゃ私はちょっとトイレで大きい方をしに行ってくるわ」

「なっ！お前そういうことは普通だまって行くんだよ！！」

こうして二人の非常に低レベルの会話が終わるのである
ただ

長田彩華が嘘をついてまでその場を立ち去りたくなるぐらいの赤面
をしていたことなど

多日咲賢治は知るよしもなかった

しつこい勧誘と読心術とダル先

「賢治、俺はやはりお前のことを諦めることができないみたいだ…」

「出だしからいきなり危ないこと言ってんじゃねえよ！誤解されるだろ…！」

はいどうもみなさんこんにちは多日咲賢治です
出だしからいきなり変な感じで始まってしまいもうしわけありません…

ただ一つ勘違いしないでいただきたいのは
別にこの作品のネタがなくなってきたからBL要素を入れたとかそういうわけではありません

そこんところはご理解のほどよろしくおねがいします…

ところでみなさん

一番最初に喋ってたやつがいったい誰なのか

気なりません？（気にならねえよ…）

はい説明しましょうこの方は江

「俺の名前は江戸前強志^{えどまえきょうし}！男子野球部で1年3組！ちなみにエースピッチャーをさせてもらっている！今の目標は甲子園出場だ！みんなこれからよろしく頼む！」

そうそう

江戸前強志っていうのこいつ
ってあれ…？

ちよつとまでよ…

「…お前今俺の心読んだ？」

「うん」

「うんじゃねえよ！！てかなんで？？どうなってるのお前！？つか何したのお前！？」

予想以上にテンパってる自分が恥ずかしい…

「俺は読心術が使えるんだよ、お前は出来ないのか？」

「使えるわけねえだろ！！てかそこまでの確に心読む奴見たことも聞いたこともねえわ！！」

「当たり前だ、恐らくここまで高度な読心術が使えるのは世界を探しても俺だけだろうな」

「お前どんだけすげえんだよ！！」

おおつと強志の詳しい説明がまだだったな
ちなみにこいつとは中学からの付き合いで

見てて分かるようにテンションが高いバカだ

ただ名前通り野球に関したはホントに強い志を持ったやつであり
実力も相当なものだ

なにせ野球強豪校であるうちの学校で1年からエースになれちゃう
んだからな

あとイケメンで優しいからめちゃうちゃ女子に人気あるらしい

「テンションが高いバカは余計だ」

「だから人の心を勝手に読むな！てかなんでお前読心術なんて使えるんだよ！」

「野球の試合では時に相手の心を読まなくちゃ勝てないという場面がある、その場面の時のために読心術を身につける特訓をしたんだ、

そしたらいつのまにか使えるようになってたんだよ」

「へえ…」

これに関してはへえしか言えねえよ…

「てなわけで賢治、お前だって人の心を読むようになりたいだろ？今野球部に入ればその特訓方法を教えてやってもいいぞ！どうだ入る気になっただろう？」

「いいよ…、俺別に四六時中人の心の中なんて分かりたくないし…」
そうそう遅くなったけど現在の状況の簡単な説明をさせてもらいます
現在は放課後
いつもなら

強志は部活に

俺は家にと

さっそうと向かう（帰る）のだが

何やら強志の部活が今日休みだったらしく

なんか良く分からんが放課後に俺が野球部に勧誘されている

そのために強志がいろんな話を俺にしてくる

そんな場面です

ちなみに最初の強志が言った『賢治、俺はやはりお前のことを諦めることができないみたいだ…』というセリフも部活勧誘的な意味なので

断じてBL発言ではありません

「さっきからBLBLって言うてる、ってか心の中で言うてるけどBLって何なんだ？ブリーフの略か？」

「んなわけねえだろ！ブリーフ発言でなんだよ！…まあ知らないなら知らないでいいよ…」

「うん、ならあまり気にしないことにする、てかその前になんてお前は野球部に入部する気がないんだよ！」

「だから前にもどつかで言った気がするけど、俺は部活としてスポーツをするのが嫌なんだよ、それに俺ルールとかいろいろあつたりするスポーツ苦手なんだよ」

「いいじゃないか！俺と一緒に青春の汗をベウロベウロベウロ流そうぜ！」

「汗の流れ方キモッ！！っ！かお前はなんで俺を誘うんだよ！」

「俺はお前の足の速さに惚れたんだよ！」

「確かに足には自信あるけどよお、今から入ったってもう遅いだろ」

「遅くねえよ！お前ならきつと1年で最強の1番打者になれるぜ！」

「無理だって！、とにかく俺は部活には入らん！悪いが他の奴にあたれ」

「くそおお！この頑固ババア！」

「そこせめてジジイにしろよ……」

「ようし分かった！お前がその気なら俺も考えがある、もしこのままお前が野球部に入らないって言うなら俺はここから飛び降りる！！（現在地は2階の1年1組の教室内）」

「え、え〜と…どうぞ」

「お前は鬼か！」

とこんなやりとりをしていると見覚えのある人が俺たちのいる教室に入ってきた

「あつ、ダル先」

はい説明しましょう今回二人目の新キャラこと
たるいせんせい
樽井先生

1年国語科担当であり我が一組の担任だ

1組の生徒には主にダル先（ダルそうにしてる先生を略してダル先）と呼ばれている

性別男、年齢29歳、未婚

とにかくいつもかっただるそうにしてて

おまけにやる気なしで

おまけに超適当な先生である

ぶっちゃけこんな大人にはなりたくないランキング確実に1位をとるだろう…

「なんだお前らまだいたのか、さっさと帰れよ」

「ういーす、ところでダル先は何しに来たんだよ」

「俺はあれだよ…え〜となんだっけ…、ああもういいや忘れたからパス」

「あんた超適当だな！」

てなわけで俺とダル先による会話終了…
ただここで俺はあることが気になった

それはダル先が内なる心でもかつたるそうにしているのかということだ

いつも外ではかつたるそうにしてるダル先
いったいどんなことを考えているのだろうか…

実はダルそうにしているふりだったりして…
強志の読心術なら解読できるんじゃないか？

「もちろん、当たり前前にできるぞ！」 ↑ 強志の心の声

「なっ！お前俺の心に入り込むこともできるのか！？」

「ああ、そのぐらい朝飯前だ！」

「どんだけやねん！！…まあいいや、なら試しにダル先が今考えることを要約してみてください！」

「了解だ！」

そして強志は目の前でダルそうな面、略してダル面をしているダル先をにらみつける…

「なんだよ江戸前…、そんな睨むなよ…、てかなんだお前ら急にだまりやがって…」

「い、いやあダル先は相変わらずダルそうな顔だなあって思ってね…」

「ほっとけ、この顔は生まれつきだよ」

生まれつきなのかよ！

あんだっただけ生まれたときつまんなかったんだよ…

「解読完了！」

「おお！でどんなことを考えてた？」

「要約するとだな『あゝ今日も一日だったなあ…ってまだ一日おわってねえじゃん…、ホントダルいぜ…、そーいや明日のい。とものテレフォンショッキング誰来るんだっけか？確か…ひまつぶしさとし？ひつまぶしさとし？どっちだっけかなあ？絶対どっちかなんだよなあ…ええ』と、ああもうひつまぶしさとしでいいや…』になる…」

「……………」

「つまぶきさとしたよ！！！！！！」

「うおっ…なんだよいきなりでかい声出しやがって…ってなんでお前俺が考えてたこと分かったよ…」

「うるさーい！！変に期待させやがって！！結局あんたは外も中もダルののかよ！！しかもひつまぶしさとしかひまつぶしさとしって誰だよ！！二択の選択肢がすでに間違ってたんだよ！！」

「期待ってなんの話だよ…もう分けわかんねえよお前…、お前らなんか変だぞ…、さっさと帰って寝ろ、じゃあな」

と言ってダル先はダルそうにその場を去って行った…

「……………」

「……………」

「賢治落ち着いたか…？」

「…え、あ、うん…」

「よし、じゃあ話を戻すぞ」

「え？」

「賢治！お前野球部に入れ！」

「しつこいわ！！！」

昼休みの騒がしいひと時

「ちょいと気になったんだけどさあ、賢治さんと彩ちゃんって付き合ってたの？」

「付き合っていないわよ！」

「付き合ってたねえよ！」

声がシンクロした…

「あつ、そうなんだ！私はてっきり付き合ってるのかと思ったよ」

「そんなわけないじゃない、いくら鏡子でも言っていていいことと悪いことがあるわよ大体こんなミドリムシだかゾウリムシだか分かんないような生物誰が好きになるのよ幼馴染じゃなければこんなのに殺してるところよ」

「ひどっ！！てか幼馴染だつてことに俺命救われてんの！？」

やあやあみなさんこんにちは多日咲賢治です

早速だけど今俺等と話している人について説明させてもらう

名前は明智鏡子^{あけちきょうじ}

性別は女、年齢は俺や彩華と同じ16歳で春緒高校1年2組

所属の部活は弓道部

俺や彩華とは小学校からの友達

特に彩華とは仲が良く

弓道部の朝練がない時はいつも彩華と一緒に登校しているらしい
ちなみに頭が良く

毎回試験では1ケタの順位をとっている

正直俺は順位で勝ったことがない…

とまあこんな感じのいたって普通な人だ

そんで続けて今がいたいどんな場面なのか説明しますと
学校の昼休みに明智さんが1組に遊びに来て

何故か明智さんの提案で3人一緒に弁当を食べることになり
弁当を食べながら雑談してる

そんでもって何故か俺がすごいけなされた

そんな場面です

「そんなこと言ってるけど彩ちゃん賢治くんと話してるときすごい
楽しそうだよな」

「な、何言ってるのよ！そんなわけないでしょ！」

何故かここで彩華の顔がめっちゃくちゃ真っ赤になった…

「おい彩華お前めっちゃくちゃ顔赤いぞ？大丈夫か？具合悪いなら保
健室行った方がいいんじゃないかねえか？」

「うっさいわね！賢治が行きなさいよ！てか許可なしに人の顔勝手に
見てんじゃないわよ！！！」

「なんでだよ！！！！せつかくこっちは心配してやったのに！！！」

「心配？はっ！微生物に心配されるほど私は落ちぶれちゃいないわ
よ！！！」

「なんだとおお！！！てか俺は微生物じゃないわ！！！！！」

「は？何言ってるの？は？」

「てんめえええ！！！！今日という今日はぜってえ許さねええ！！！！！」

「ちよっ…二人とも落ち着いてクラスのみんな見てるから…」

「多日咲！長田！おめえらうるせえぞ！！ちよっとは静かにしろ！！！」

つてなわけでダル先登場…

「すいません…」

「すいません…」

「ここもシンクロした…」

「全く昼飯の時ぐらい静かに…ってお前ら高校生のくせになかなかうまそうな弁当食ってんじゃねえか」

「うわあ…」

「なんか良く分かんないけど興味持ってきたあ…」

「どれどれ」

「そう言つとダル先は彩華の弁当から卵焼きを一つ指でつまんで食いやがった…」

「お！うめえなあ！これあれだろ隠し味にあれをあれするとき良く使っあれ入れてるだろ？」

「あんた言ってること主語も動詞も全部あれだから全然わかんねえわ！！！」

「喉まで出かかってるんだけどなあ、ああなんかもつめんどくせえからいいや…」

「ちなみに言つときますと隠し味とかそんなもん一切してませんから」

「…え？あ、ああ実は俺もそうなんじゃねえかって思ってたんだよ…」

「あんた超適当だな！！」

そう恥をかくとダル先はいつも通りだるそうにその場から去って行った…

「樽井先生っていつもあんなかんじなの…？」

「まあね…」

「そういえば2組担任の葛城先生かつらぎせんせいって確かカツラなのよね？」

「なにそのいきなり発言！？」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「軽！！ってか2組生徒はそれを普通に受け止めてんの！？」

「…か1年受け持つ先生個性的な人ばっかやな…」

「あとオカマだよ」

「個性的過ぎるにもほどがあるだろ！！ってまあそれは薄々気づいてたよ…」

カツラでオカマってどんだけやねん…

「ただ先生本人はカツラのこともオカマのこともバレてないと思っ

てるから出来る限り知らない振りをしてあげてね」

「分かったわ“出来る限り”知らない振りをするわ」

「っってお前絶対今なんかたくらんだだろ!!」

「は？何言ってるの？は？」

「またそれかよ!!」

てなわけで俺たちの昼休みの騒がしいひとは終わったのである…

葛城先生は結局泣きながらその場を立ち去った

彩華や明智さんとお昼を食べていたときからかれこれ2時間が経ち現在はこの日最後の授業である数学の時間

いつもならこの時間になると大体の生徒がボーっとしたり居眠りをしたりするのだが

今日はそんなことする人は一人もない

それどころか

皆同じ方向に目を向けている

しかも真剣な眼差しで

もちろん俺もだ

何故全員がその方向を見ているのか

それは簡単なこと

その方向に信じられない光景があるからだ

そう

葛城先生のカツラがずれているという凄まじい光景がね……

「あらあ？今日は珍しく居眠りしてる人が一人しかいないのねえ」

あいかわらずオカマ口調（というかオネエ口調）で喋っているのは数学担当であり

2組の担任である葛城先生……

というかかれこれ授業が始まってから10分は経っているのに

彩華は全然何も喋らない

何でだ？

あいつこつという状況めちゃくちゃ好きなはずなのに

とまあそう思いながらも右を向いてみると

彩華がめっちゃくちゃ気持ち良さそうに寝ていた……

居眠りしてる唯一のやつお前かよ！
とツツコんでやろうかと思っただけど
起きられてもいろいろ困る

というか起きて葛城先生が酷い目にあってしまつのもかわいそうだ
と思つたのでやめた……

「それにしてもさっきからみんなあたしのことジロジロ見てどうし
たの？もしかして……」

ヤバッ！

気づいちゃった！？

せつかく気使つて彩華のこと起こさないであげたのに意味ねえじゃ
ん！

「みんなあたしの好きな食べ物を知りたいのねえ？　もう教えて欲
しかったんなら素直に言つてよん」

うわあ……

なんか分けわかんねえ勘違いしてるよ……

「あたしの好きな食べ物はいちゴマシユマロよん」

こんなこと本当は言いたくないんだけど……

キモッ！

マジでキモッ！

あんた54歳でオカマでカツラで好きな食べ物いちゴマシユマロっ
てどういうこと！？

俺はてつきりわかめとかひじきって言うのかと思って覚悟してたのに
いちゴマシユマロって……

今本気で吐き気がしたわ！

てか俺以外のみんな（彩華以外）も全員手で口押さえてるし……
クラス全員（彩華以外）を吐きそうにさせる発言をするとは
葛城先生リアルに恐ろしいな……

「そうそう、そういえば私最近ある買い物したのよお、なんだと思う？」

どうせカツラとかだろ……

「実はウィッグ買ったのよお」

あながち間違いでもなかったああ！！！！

……ってか

なんでこの人ツラのくせにおしゃれ用カツラ買ってんだよ！！
何？あんたカツラの上にカツラかぶる気ですか？

ダブルカツラーになる気ですか？

そうだとしたら本気で笑えねえぞ！

「でもウィッグっていまいち使い方が分かんないのよねえ」

あんたが今かぶってるのと同じだよ！！

「ところでみんなはもう気づいてると思うけど実はあたし……」

えっ？何？

このタイミングでカツラのこと告白するの……？

まじで言うのこの人……？

「年下の子がタイプなのよねえ」

知らねえよ！！

てかどうでもいいわ！！

オカマ教師の好きなタイプとかマジどうでもいいわ！！

「だからみんなあたしが先生だと思って油断してると遠慮なく襲っちゃうからね！なんちゃってえ」

その瞬間である

一番前の席（俺の列の）に座るクラス委員が

まるで火でも吐くかのように

ものすごい勢いでリバーシした……

しかもそれを見たせいなのか周りの生徒もどんどんリバーシし始め最終的にはクラスの半数以上の人がりバーシをする形になった……

まさにもらい泣きならぬ

もらいゲロである……

「え！？ 何？ みんな突然どうしちゃったの！？」

あんたのせいでこうなったんだけどね……

「何？とつてもうるさいんだけど？私起きてしまったじゃない」

「お前起きたのか……」

はい、長田彩華さんがお目覚めになりました

「まったく私がせっかく毒りんごを食べたあとの白雪姫のようにスヤスヤ眠っていたというのによくも起こしてくれたわね、睡眠妨害で訴えるわよ」

「授業中に寝てるお前に訴える権利はない！」

「まあそれはさておき、このおぞましい光景は何？あと臭いが半端じゃないんだけど」

「えーと……まあそれは色々ありましてね……」

「色々って何？私にはクラスの半数がゲロを吐くような状況なんて想像できないんだけど？」

「えーと何ていうか今ここでは言えないっていうか……って女子が普通にゲロとか言うな！」

「ああ分かったわ、葛城先生の仕業ね」

「えっ！ あたし？ あたし何もしてないわよ？」

「いや、誰も先生の意見は聞いてないんで黙っててもらえます？
このキモオカマ野郎」

「え？ 今何て……？」

なんか宮本先生のことを思い出すなあ……

「まあどうせ葛城先生が一人一人のどちらかを引っ張っておう吐させたとかそんなところでしょ？」

「さすがに先生でもそこまでクソ人間じゃねえよ……！」

「そこまでってどういう意味よ！」

「ええと、そのまんまの意味です……」

「ひどっ！……！」

「ところで先生？」

「何かしら……？」

「本当に申し上げにくいのですがこの際なんでも言ってしまうですね、ズラがずれてます」

「あ……」

クラスの吐いた人から吐いてない人まで
すべての人が今の一言で固まった……
もちろん俺も……

はあ

なんていうかさあ

彩華が起きた時点でこうなることは予測できてたけど
まさかこんなあっさり言っちゃうとはさすがに思わなかったわ……

「ええつと……」

そう言っつて約1分間葛城先生は考え込むと被っていたカツラを手に
持ち口を開いた

「これはウィッグです」

「……」

「……」

「……な、なんちゃってえ！」

そうして先生は泣きながらすごいスピードでその場を去って行った
……

江戸前強志の恋 前編

「俺は恋をしてしまった」

授業と授業の間の休み時間

俺は強志に屋上まで連れて来られ
いきなしこんなことを言われた……

「へえ……、おめでとう」

「軽くねえかお前!? ちょっとは興味持てよ!」

「あ、ああごめん……で相手は誰だ?」

「女子野球部の1年生エースだ」

「ああ、4組の安早市勇姫さんか」

説明しよう

あさしゆうき
安早市勇姫

クラスは1年4組、性別は女(当たり前だけどね……)

さっきも言ったが女子野球部の1年エース

ルックスや野球の上手さから男子女子共に人気があり

校内にはファンクラブもあるらしい

「さすがは賢治、的確なキャラ説明だな」

「だから人の心を読むなよ……」(注、強志は人の心を読むことができます)

「まあそのことは置いて、実は賢治にはやってもらいたいことがある」

「ええ、めんどつなのは嫌だぜ」

「大丈夫簡単なことだ」

「何だ？」

「安早市さんのメルアドをゲットしてきて欲しい」

「お前は女子か！　つつか全然簡単じゃねえわ！！」

「大丈夫お前ならできるさ！」

「無理だよ！　……そもそもなんでお前は安早市さんのことが好きになったんだよ」

俺がそう言つと

強志は『なんだ実は気になってたんじゃん』というような顔をして話始めた

「実は一昨日、女子野球部と練習試合をしたんだ」

「練習試合？　男子と女子じゃレベルが違い過ぎるだろ」

「普通に考えたらそうなんだが、なんと俺たちは負けてしまったんだ、しかも一点も取れずに」

「うそーん！　お前ら県大会決勝とか普通に毎回行っちゃうほどのレベルなんだろ！？」

「ああ、だけど負けてしまったんだよ」

「まじかよ……」

そう言えばなんか聞いたことがあるような気がする

今年から何故か女子野球部がめちゃくちゃ強くなったとか……

1年エースと1年4番がもの凄いとかが……

でも

それにしたって普通男子には勝てねえだろ……

「そんでもってそのとき勇ましく球を投げる彼女の姿に心を奪われてしまったというわけなのさ」

「なんか言っちゃ悪いがお前ら情けねえな……」

「仕方ねえだろめっちゃ強かったんだから!」

「それにしたってなあ」

「うるせー! とりあえず任せたからな! んじゃそういうことで」

そついうと強志は俺の顔など一切見ずにその場から去って行った……

「なんかめんどくせえことになっちまったよ……」

それから俺もトボトボその場を去った……

あれから時間は経ち現在は昼休み

俺はいち早く昼飯を食べ終え

とりあえず1年4組に向かった

もちろん理由は安早市さんのメルアドを手に入れる為である
とまあ行動を開始したものの
作戦とかは何一つありません……

「どうすつかなあ……」

直接聞いたりしたら確実に怪しまれるよなあ……

しかもファンクラブまでいるほどの人気なんだろう？

絶対俺が好きなんだと勘違いされるよ……

とそんなことを考えながら廊下を歩いていると
前から一人の女性がこちらの方に歩いてきた

「何アホみたいな顔して悩んでんの？」

はい、長田彩華さんです

「だからお前はひとこと余計なんだよ！」

「で？ 何を悩んでるの？」

「え？ いや何でもねえよ気にするな」

「何？ 隠す気なの？ この私に隠しごとをするなんて随分と偉く
なったものね」

「お前何様だよ！」

「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと話さないよ」

そういうと彩華はポケットからボールペンを取り出し
そのボールペンを俺の鼻の穴におもいつきし突っ込んできた……

「いたいいたいたいいたい！！ 分かった！ 話すからやめてくれえ！」

「分ければよろしい」

そして俺は今まであったことを一部始終話した
強志スマン……

「まあようするに江戸前強志のために安早市勇姫のメルアドを手に入れたいけど直接聞くのはちょっとまずいから何か他に良い方法はないかと悩んでいましたってことね？」

「まあそうです……」

「だったら安早市勇姫の友人からメルアドを教えてもらえば？」

「それも一つの案にしてたんだけど、よく考えたら俺安早市さんの友人関係とか全然知らねえんだよな、だからっていろんな人に聞きまくるのも嫌だし」

「山本桃子^{やまもと とうし}」

「はい？」

「山本桃子という人が1年4組にいるわ、その人は安早市勇姫の親友よ、その人だったらきつとメルアドを知ってるんじゃない？」

「えっ……」

「何よ」

「いやあ彩華がまさかこんなまじめに協力してくれるとは思わなかったから……」

「何それ？　せつかくこつちは親切に教えてあげたのに素直にお礼も言えないの？　賢治は相当人をいらいらさせるのが好きみたいね」

そう言つと彩華はポケットから今度は二本のボールペンを取り出した……

「ごめんごめんごめん！！　めっちゃありがとう！　感謝しすぎてもうやばいです！」

こう言いながら逃げていく俺の姿はさぞ情けなかったのではないかと思つ……

江戸前強志の恋 後編

そんなわけで4組到着

とりあえず山本桃子さんに出て来てもらわないと話が進まないの
で近くにいた人に呼んでもらうことにした

すると予想してた容姿とはまったく違って違う人が4組の中から出
てきた……

「ええと……山本桃子さん……？」

「そうだけど何？」

「随分と大きいですね……」

山本桃子さんは縦にも横にめちゃくちゃでかった……

「こんぐらいでなくなきゃ女子野球部の4番は務まらないのよ」

「へえ……」

1年生4番ってあんただったのかよ……

「それで何の用？」

「ええと……安早市勇姫さんのメルアドを教えて頂きたいと思いま
して……」

「それは無理よ」

「えっ……」

やっぱりかあ……

だよなあ

こんな見ず知らずの人に
親友のメルアド教える訳ないよなあ……

「だって勇姫ケータイ持ってないもん」

そういう理由かよ！

「ああそうなんですか……」

「でも勇姫ポケベルは持ってるわよ」

今どきポケベル！？

「いやじゃあいいです……食事中すみませんでした、あとこのことは安早市さんには内緒にして頂けますでしょうか？」

「分かったわ」

これで安心だと俺が安堵すると
彼女は突然右手を出してきた……

「……なんでしょう？」

「内緒にしてあげる代わりにカレーパンの代金120円ちょうだい」

「え……？」

「私カレーパンが大好きなの」

知らねえよ！！

あんたの好きな食べ物なんて知ったこっちゃねえよ!!

「……はいどうぞ」

仕方ないので120円あげました……

「……かなんで俺が強志のために120円もかけなきゃいけないんだよ！」

するとその時だった

クラスの中から一人の女性がすごい勢いでこっちにすっ飛んできた

……

「桃子！　　いったい何をしてる！」

「ああ勇姫、実はこの人が勇姫のメルアド知りたいてって言ってきてね、あっこれ言っちゃいけないんだっけ？」

はい、今すっ飛んできたのは安早市勇姫さ……

ってこの人いきなり約束破りやがったんですけど！

120円返せや！

まあそんなこんなで安早市勇姫さん初登場

「うそつけ！　　私には桃子がこの男に120円を無理やりとられたように見えたぞ！」

逆だよ!!

俺が120円とられたんだよ！

でもって安早市さんに事情説明をした……

「これはこれはもうしわけない、どうやら私の勘違いだったようだな」

「あ、いや分かればいいですよ、それよりなんで安早市さんはケータイを持ってないんですか？」

「黙れ」

「え？…はい？」

あれ？

俺今なんか怒らせるようなこと言った……？

「私は父と母からもらったこの勇姫という名前に誇りを持っている、だから私は名字で呼ばれるのが大嫌いなんだよ」

「ああ……それじゃあ勇姫さんはどうしてケータイを」

「黙れ」

なんでえー！

俺ちゃんと名前で呼んだじゃん！

「私の名前は勇姫さんなどではない！ 勇姫だ！！」

「めんどくさっ！！ あんためちやくちやめんどくさいわー！！」

「めんどくさいことから逃げてたんじゃいつまで経っても強くなれないぞ！」

別に強くなりたかねえよ……

「じゃあええと……勇姫はなんでケータイを持ってないんですか？」

「敬語で話されるのは好かん」

「あのさつきから俺を怒らせようとしてま……してる？」

「そんなことはない」

もういいや……

「……なんで勇姫はケータイを持ってないんだ？」
この質問何回させんだよこの人……

「電子機器はあまり好かんのだ」

「へえ……」

この答え聞くまで長かったなあ……
てかじゃあなんでポケベル持ってたんだよ……

「ところで君は人生というものが初めから1本の道だと考えている
いか？」

「えーと……はい？」

安早市さんはなんか語り始めた……

「確かに私もそう思う、だが人生というものは初めから一本の道で
はないんだと私は思う、人生には1本の道になるまでの順序がある、
それぞれの人がたくさん道のの中から好きな道を1つ選んでこそ初
めて1本の道になるんじゃないか、私はそう思うんだ！」

「いや……そんなに熱く語られても……」

「そして私はたくさんの道の中から野球という道を選んだ！ よって今私は野球のことしか考えられん！ だから君とは付き合うことができない！ つと今まで私が話した熱い話を全て江戸前強志に伝えておいてくれ」

……あれ？

……なんかおかしいぞ？

「……え？ ……どういうこと？ てかなんでそのこと知ってんの……？」

「それじゃあ失礼する」

そういうと安早市勇姫はさっそうと教室に帰っていった……すると今までずっとそこに立ちつくしていた山本さんが口を開いた

「多分だけど勇姫は君の心の中を読んで、そんでもって江戸前強志の思いを知り、交際に対してのお断りの言葉を君に伝えるよう言ったんじゃないかな」

「あつ……そういうことね……説明ありがとう……」

俺がそう言うのと山本さんは『いえいえ』と言い

安早市さんと同じように教室へと帰って言った……

「てか安早市さんも読心術使えんのかい！！」

そんなわけで強志は思いを伝える前に振られてしまったのでした……

最終的に治は気絶してしまった

現在は夜8時

夕食を食べ終え

いつも通り自分の部屋で俺が勉強をし始めようとしていたときだった俺の部屋に治おちむが入ってきた

「なんだよ、俺は今から勉強するところなんだ邪魔すんな」

「邪魔なんかする気ねえよ、ただリンゴ持ってってやれって母ちゃんに言われたから届けに来ただけだよ」

「なんだそうだったのか、悪いな」

俺の弟である治は12歳の小学校6年生

俺に似てまじめで

おまけに俺に似てめちゃくちゃ普通な人間だ

「そんなことより兄ちゃんあのさあ……」

治は俺の部屋にある小さなテーブルの上にリンゴの入った皿を乗せると

急に恥ずかしそうに話かけてきた

「なんだよ？」

「あのお……さ、最近彩華さんうちに来ねえな……」

「なんだ？ 来てほしいのか？」

「べ、別にそういうわけじゃねえよ！」

「じゃあなんでそんなこと聞くんだよ」

「いや、ただちよつと気になってさあ……」

「お前もしかして彩華のこと好きなのか？」

「べ、別にそんなんじゃないよ！」

「……じゃあ嫌いなのか？」

「そんなことねえよ！」

「何なんだよ！ 好きなんだろ？ 素直に言えよ！」

と俺が言つと治は混乱したのか何なのか
突然顔を真っ赤にして怒鳴るように話し始めた……

「あ、ああ好きだよ！！ 大体あんな綺麗な人好きにならない人なんているわけねえじゃん！！ いつもただの幼馴染とか言ってるけど実際のところ兄ちゃんも彩華さんのこと好きなんだろ！！ そっちこそ素直になれよ！ このバカ兄貴！！」

「なんでそういう話になんだよ！ 俺のことはどうでもいいだろ！」

「うるせえ！ 彩華さんは絶対やらねえからな！！」

ドンッ！！

と勢いよく扉を閉め

治はこの部屋から出て行った……

「何なんだよあいつ……」

てかなんで弟と彩華の取り合いしなきゃいけないんだよ……

そして次の日

俺は学校でふと昨日の治との会話を思い出した

「なあ彩華、そっぴや最近お前うちに来てねえよな？」

「はあ？　行くって言ってんのに賢治がダメって言うんじゃない」

「それはお前がいつも深夜にうちに来ようとするからだろうが！
深夜じゃなけりやあ断ったりしねえよ！」

「じゃあ逆に何で深夜じゃだめなの？」

「そんなの！！……色々とまずいからに決まってるだろ」

「ああ今賢治エロいこと想像したでしょ、これだから腐ったくさや人間は嫌だわ」

「んなこと想像してねえよ！　つーかだからその腐ったくさや人間で何！？」

「まあ、それなら丁度良いわ、勉強会も兼ねて特別今日賢治の家に
行ってあげるわよ」

「特別ってどういう意味だよ……」

「特別の意味？ 分からないなら辞書でも引いたら？」

「お前なあ……」

そんなわけで彩華がうちに遊びに来ることになった

そんなわけで現在は俺の家のリビング

「まあ、適当に座ってくつろいでてくれや、今何か飲み物持つてくるから」

「あいかわらずむかつくぐらい綺麗な家ね、羨ましすぎて吐き気がするわ」

「お前それ褒めてんのかけなしてんのかどっちだ……？」

「どっちもよ」

ここで俺の家のちょっとした説明をさせてもらう

俺の家は2階建の普通の家だ

普段俺がいる自分の部屋や治の部屋は2階にあり

それ以外の部屋は大体1階にある

そんでもって俺たちが今いるリビングも1階にある

何故勉強会をする部屋を俺の部屋ではなくリビングにしたのかという

まあそれはただ単に家に今日親がいなかったからである

ごめん嘘です……

本当の理由は俺の部屋が今めちゃくちゃ汚いからです……

「そうだお前麦茶とオレンジジュースどっちが良い？」

「じゃあアセロラジュースでお願いします」

「選択肢外のことを言うんじゃないやねえよ！！」
「てか何でアセロラ……？」

「じゃあオレンジジュースで勘弁してあげるわ」

「なんでお前そんな偉そうなんだよ……」
すると突然玄関の扉が開いた音が聞こえ
同時に「ただいまー」という声も聞こえてきた

はい、治くんの帰宅です

「兄ちゃん聞いてくれよ！ 今日帰りに変なおっさんがカツラ風に
飛ばされそうになってんの必死に抑えてるとこ見たんだ！ しかも
そいつめっちゃオカミみたいな喋り方で『きゃあ！、あたしのウイ
ッグがあ！』とか言ってたぜ！ 超おもしろか……」

そんな話をしながらリビングにかけ込んでくると同時に
治は彩華と目が合った

……ってか

治が帰りに見た変なおっさんて確実に葛城先生だろ！！

「あら、お邪魔してます、そういえば久しぶりね治」

「ど、どうも……それじゃあごゆっくり」

そして顔を真っ赤にしながら治は2階へとかけ上がっていった……

「あら、治会わない間に随分とひとみしりになったわね」

「ああ、なんかそうみたいだな……ちょっと呼んでくるわ」

そして俺は2階に上がり

治のいる部屋の前まできた

すると中から『なんでだ！　なんで俺はこんなにチキンなんだ！
せつかく久しぶりに会えたというのに！　俺のバカあああ……！』
という声が聞こえてきた……

「何やってんだお前……」

「に、兄ちゃん！」

「ほら、下に降りてちゃんと彩華に挨拶しろよ」

「無理だよ……絶対無理だよ……」

「何だよ！　昔はあんなに普通に話してたじゃねえか……」

「人は変わるんだよ……」

「こんな時に何格言ぽいこと言ってるんだよ……」

「うるさい！　てか連れてくるなら先に言えよ！」

「連れて来てやったんだから文句言つなよ……」

「しかし、それにしても……」

「あ？どうした？」

「彩華さんめっちゃくちゃ綺麗だったなあ」

「どんだけ彩華のこと好きなんだよ……」

「う、うるさいなあ！」

「いいから行くぞ！」

そして俺は『やめてくれえ！』という治の言葉を無視して強引に引っ張り

無理やり下の階まで連れていった

するとリビングでは彩華が超暇そうにオレンジジュースを飲んでいた……

「彩華悪い、待たせたな」

と俺が治の背中を押すと

覚悟を決めたのか治は顔を真っ赤にしながら話し始めた

「ええと、彩華さん久しぶりです……」

「久しぶりね」

「あ、あのお、彩華さん俺のことどう思います……」

おい……

普通いきなりそんなこと聞くか……？

「ええと強いて言うなら、可愛い弟かな？」

「か、か、可愛い……」

その瞬間である

治は鼻血を出しながら気絶してしまった……

ただ

気絶したのにもかかわらず治の顔はめちゃくちゃうれしそうだった

……

彩華が熱を出しました 前編

朝5時

いつも起きる時間よりも1時間早い時間

俺は目覚まし時計ではなく

電話で起こされた

相手はまあ

彩華だ……

「……おいおい、こんな朝早くに電話してくんじゃねえよ……」

「大変だわ、大変なことが起きてしまったわ」

「あ？ 何だよ？」

「私が熱を出してしまったのよ」

「ああそう……」

……普通それ自分で言うか？

「何？ その反応？ ムカつき過ぎるんですけど」

「……悪い悪い、んじゃ休むこと先生に伝えておくから」

「それは無理です」

「あ？ 何でだよ……」

「賢治には私の看病のために学校を休んでもらいます」

「何だよ！ つーかななことできるわけねえだろ！」

こいつはホント分けわかんねえこと思いつくな……

「は？ 私に逆らう気？ 賢治随分と偉くなつたじゃない」

「だからお前何様だよ！！ …… つつてもまあ家にはお前一人しかないわけだしなあ、学校の帰りに寄るくらいならいいぞ」

「なら今回は特別それだけで許してあげるわ」

「あのなあ……、んでお前なんか欲しいものとかあるか？」

「地位と名誉が欲しいです」

「そついうのじゃねえよ！！ なんか食いたいものとか飲みたいものとか必要なものは無いかつていうので聞いたんだよ」

「ならフルーツサラダヨーグルトとアセロラジュース」

「最初っからそう言えつつうの…… ってか何でアセロラ!？」

「あんまり遅くならないでね、殺したくなるから」

「だからお前は一言余計なんだよ！ んじゃまあとりあえず今はしっかり寝てろよ」

「まったくこんなことになるんなら人体錬成なんてしなければよかったわ」

「お前何やって熱出してんだよ!! …… じゃまあお大事に」

そして俺たちはお互い電話を切った

そのあとまだちょっと時間的に寝れたので俺は結局寝ることにした

……のだが

またしても邪魔者が立ちふさがる……

突然治が俺の部屋に入ってきたのだ……

「……何だ突然？」

「兄ちゃん今彩華さんと電話してただろう」

「だったら何だよ……」

結構小さい声で電話してたのによく聞こえたな……

「ずりいぞ!! ケータイとか使いやがって卑怯だ!!」

「何を言ってるんだよお前は……」

うわあ……

何かめんどくさいことになったあ……

「そんで何の話してたんだよ」

「ああ? 熱出たから今日学校休みますっていうただの報告だよ」

「兄ちゃん熱あんのか?」

「……俺じゃねえよ、彩華だよ」

「そんな！ 何でだよ！！」

「……何でだよって、人間なんだから熱ぐらい出すだろ」
すると突然治は涙を流し始めた……

「くそお！ 彩華さんが今苦しい思いをしてるというのに俺は何もしてあげられない！ なんて俺は無力なんだああ！！！」

そう言つと治はすごい勢いで自分の部屋に帰っていきました……

「ホント何しに来たんだよあいつ……」

そんなこんなですっかり寝る気が失せてしまったので
結局俺も起きることにしました……

そんでもって時間は経過し

現在は学校終了後の午後4時

彩華に言われたものを買うため

そしてその他もろもろを買うために

俺は今家の近くのスーパーに来ていた

「電話の声聞いている限りではめっちゃくちや具合悪いって感じではなかったからなあ、うどんぐらいなら食えるだろ」

こんな感じで

俺がブツブツ言いながら店内を回っていると
突然後ろから誰かに話かけられた

「オッス賢治くん」

「お、明智さん」

俺に話しかけてきたのは明智さんだった

そして俺の買い物かごに入ってる食材を見るなりこんなことを言うてきた

「へー意外、賢治くんって料理とかするんだね」

「まあ一応、そんなにうまくはないけど初歩的なのは色々できるよ
勘違いされたくないのと言っておくが

別に俺は見栄を張っているわけではないぞ
本当に料理はできる

自分で言うのもなんだが

家族にうまいと言わせたことだってあるぞ！

「羨ましいなあ、私料理とか全然だめなんだよね」

「そっちの方が意外だな明智さんめちゃくちや料理うまそうなのに、
ところで今日は部活休みだったの？」

「うん、今日は顧問の葛城先生がエステに通う日だから」

「へえそうなんだ……」

……ってかあのカツラオカマ野郎

そんな理由で部活休みにするなよ！

あと部員もちよっとはおかしいとか思えよ！

「その材料的に……、もしかして今から彩ちゃんのおみまいに行く
の？」

「あ、ああ……」

本当に勘のいい人だ……

まあかこの中にうどんの麺が入ってる時点で何を作るのか分かったにしても

そこから彩華の家に行くことまで読み取るとは……

明智鏡子恐るべし……

「なんかもつたいないなあ」

すると明智さんは言葉通りめちゃくちやもつたいなさそうな顔を始めた

「へ？ 何が？」

「もう二人共付き合っちゃえばいいのに」

「はあ！？ てか何でそういう話になるんだよ！」

俺はめちゃくちや熱くなった……

恐らくすごい真っ赤な顔になっていただろう……

つかスーパーでいきなり何を言い出すんだこの人は！

「だって二人ほどお似合いなカップルじゃないと思うよ」

「どこ見たらそう思うんだよ！」

「全部だよ、二人のやり取り見ててすごい仲良いなあって思わなかったことはないよ」

「あのかなあ明智さん？ 俺は別にあいつに好かれてるとかあいつの

ことが好きだとかそういうのじゃねえんだよ、ただ単に俺たちは幼馴染だから良く喋るだけで……」

「でも熱出したことをわざわざ電話したってことはそれほど賢治くんに来て欲しかったってことでしょ？」

「そんなわけねえって……」

明智さんは諦めたように一つ溜息を吐くとまた話を続け始めた

「まあ二人がそれでいいならいいけどさ、でもいつまでもそういう関係でいられるとは思わない方がいいよ、人は変わるんだから」

「……どういうことだよ」

「辛さや苦しさってのは実際にそういう目にあってみなきゃ分からないってことだよ」

何故明智さんはこんなにも目が真剣なのだろうかとそれから何故こんなにも『人は変わる』という言葉が重く鋭いのだろうか

治に言われたときは何も感じなかったのにそんなこと分かっているはずなのに……

なんだか俺は明智さんにすべてを見透かされた気分になった

「……そんなこと分かってるよ」

「ごめんなんか空気悪くしちゃったね、それじゃあ私そろそろ帰ら

なくちゃ、またね賢治くん」

「ああ、またな」

そうして俺たちは別れた

彩華が熱を出しました 中編

明智さんと会話を終えた俺は

残りの買い物（アセロラジュース）をするために
スーパーの飲み物コーナーに来ていた

「アセロラジュースはつと……」

と俺がブツブツ言いながらあたりを見回すと
飲み物コーナーの隅に

最後の一本である500ミリリットルアセロラジュースがあった

「うお！ 超ラッキー！」

と俺がそのアセロラジュースをつかんだ瞬間である
後ろからすごいでかい声が聞こえてきた……

「ちょっと待てい！ その君ちょっと待てい！」

「……はい？」

後ろを向くと

そこには見た感じ20代前半ぐらいの細い男がいた……

「このアセロラジュースは僕の方が先に目をつけていたんだ、そんなわけで譲っていただく」

うわあ……

何この人感じ悪……

「そんなの関係ないですね、俺が先にとつたんだから買う権利は俺にあります」

「なにい？ 見たところ君は高校生だね、大学生のこの僕に随分と偉そうな態度をとるじゃないか」

「はあ？ 年なんて関係ないでしょ！」

「関係大ありだよ！ 俺の通う大学ではなあ目上の人に敬語使わなかっただけで打ち首にされんだぞ！ もう今年で何人死んだことか！」

「もうそれ事件だわ！！ あんたよくそんなところに通ってるな！」

「はい敬語使わなかったから打ち首い」

「あんたウザッ！」

「ところで君打ち首って言うてみて」

「……はあ？ 打ち首」

「うわ何乳首とか言うてんのお？ マジ下ネタとかありえないんですけど」

「あんたムカつくな……」

「あーもうごちゃごちゃうるさい！ 僕は君なんかよりもアセロラジュースが飲みたいんだ！ アセロラジュースだつてきつと私に飲まれないはずだよ！」

すると男は俺がもつアセロラジュースを無理やり引っ張ってきた

「何を言ってるんですかあんたは！ 放してくださいよ！ てかごちやごちやうるさいのあんたでしょうが！！」

「うるさい！ 私は毎日アセロラを摂取しないと死んでしまう病にかかっているんだよ！ だから渡しなさい！」

「そんな病気あるわけないでしょ！」

「なんでないと決めつけるんですかあ？ 実際にそういう病気があったら君責任とれるんですかあ？」

「なんの責任だよ！ てかあんた想像以上にウザいな……」

「いいから譲ってよお！ いいじゃん減るもんでもないし！」

「減るだろ！ しかも喋り方が幼稚になってますよ！」

「譲って譲って譲ってえええ！！」

なんなんだこの人……

キアラがおかしすぎるだろ……

このままだと店員さんやら他のお客さんやらに同類だと思われる…仕方ない

譲ってやるか……

「もう分かりましたよ！ 特別譲ってあげますよ」

「は？ 何その仕方ないから譲ってあげる的な言い方？ なんかむかつくんですけど、そんな感じで渡されても全然飲む気しないんで

すけど」

「あんたは何が目的なんだよ!!」

「僕は相手に負けを認めてもらわないと嫌なんだ」

「ウザいしめんどくさこの人……」

「いいから早くゆずれえええ!!!!」

「あーもう! ならもうジャンケンしましょう」

「いやだ」

「なんでだよ!!」

「僕は手の病気のせいでグーしか出せないんだ」

「嘘つけ!! あんた今普通に手おっぴろげてアセロラジュース掴んでんだろっが!」

「うるさい!! 私はジャンケンが弱いんだよお!!!!」

「本音出たし……、じゃあどうすりゃいいんすか!!」

「あみだくじで勝負だ!」

「何故あみだ!? てかあみだくじに勝負もくそもないでしょ!!」

「ならピニヨニロンゲームで勝負だ!」

「何なんすかそれは!!」

「え？ 知らないの？ 今うちの大学で流行ってるこんなにもおもしろいゲームを？」

「知らねえよ！ てかあんたの大学敬語使わなかったときのリスクめちゃくちゃ高いくせに意味分かんねえ遊びは流行るんだな……」

「じゃあ仕方ない、人生ゲームで勝負だ！」

「そんなことやってられんわ!!」

「あーもう！ 一体何なんだ君はさっきからわがままばかり言うて！」

「それはこっちのセリフだあああああああああ!!!!」

「!!」

「やば……」

「ちょっと声をでかくし過ぎた……」

「店内の人みんな俺たちのこと見てるし……」

「少し落ち着こう……、そもそも何故君はそんなにアセロラジュースにこだわるんだ」

「だからそれはこっちのセリフだって……」

「……熱出てる友達が飲みたいって言ってるんですよ」

「な、何故それを早く言わないんだ!!」

「……」

あんたがガツガツ来てたから言う暇なかったんだろぅが……

「そういう理由があるなら仕方ない、私は諦めるとしよう」

「え？」

「それでは失礼する」

「ちよっ！ いいんですかあんなに欲しがっていたのに！」

「なあに気にするな、まだうちにはたくさんアセロラジュースがある」

と男はキメ顔で言ってきた……

「……えーと、はい？」

「うちには腐るほどアセロラジュースがあるからな、その一本ぐらい譲ってあげるよ」

とまた男はキメ顔で言ってきた……

「じゃあなんでさっきまであんなに欲しそうだったんですか……？」

「いやあ、最後の一本でなんか譲りたくない？」

またしても男はキメ顔で……

「こんのやつろおおお!!!!!!!!!!」

そして俺はその男の頭をアセロラジュースの入っているペットボトルで思いっきり殴った……

彩華が熱を出しました 後編

やべえ……

あの変な男と無駄な長話をしてしまったせいでもう6時半になってしまった……

あいつ怒ってるだろうな……

そんなわけで彩華の家の前到着

ここで彩華の家のことなどについて少し説明させてもらう

彩華は築10年のなかなか綺麗なアパートに中3の終わり頃から一人暮らしをしている

（何故一人暮らしなのかとか家庭事情についてはまた後日説明させてもらうということ）

場所は俺の家から10分ぐらいのところにあるスーパーからだとか約5分ぐらいのところにある

明智さんは良く遊びに来るらしいけど

正直俺は引越しの手伝い以来来ていない

まあホントに少しだがこれで説明終了

つてなわけで

……行きますか

そして俺は家のチャイムを押した

すると押したと同時に家の扉が開いた……

「“こんな時間”に何の用かしら？」

「……ええと、……おみまいに来ました」

「まあいいわさっさと中に入りなさいこの北京原人」

「俺是北京原人じゃないわ！……っとまあツッコミはいいとして、お邪魔します」

家の中は思っていたより片付いていて綺麗だった

「へえお前はちゃんと片付けられる人なんだな」

「当たり前でしょ、なめてんの？ そんなことより早くアセロラジュースとフルーツサラダヨーグルトよこしなさい」

「あーはいはい、ほれ」

そう言つて俺はその二つが入ったビニール袋を彩華に渡した
すると彩華は袋の中身を確認しながら自分のベットに座りこむなり首を少しきげながら俺の方を向いてきた

「なんでアセロラジュースのペットボトルこんな変な形してんの？」

「……いや……いろいろありまして」

スーパ―で出会った変な男を殴ったら形がかわっちゃったなんて言えねえよ……

「まあいいわ」

意外と彩華は気にしてなかった……

「ところでお前熱何度あったんだ？」

「朝は38度あったけど今は37度3分まで下がったわ」

「そうか、ならうどん食えるよな？」

「食べれるけど……、もしかして食事を作ってくれるの？」

「ああ、そのつもりなんだけど」

「へえ、まあ特別食べてあげるわよ」

「あのなあ……少しぐらい感謝してくれてもいいんじゃないありません？」

「うるさいわねえ、そんなのうまい飯の一つでも作ってから言いなさいよ」

「お前はどこの店の大将だよ！ そんなこと言ってるとうどんの中にお前が嫌いなほうれん草いっぱい入れるぞ！」

「何で私の嫌いな食べ物知ってるのよ」

「何でって、小学校の卒業文集に書いてあっただろ」

「良くそんなこと覚えているわね、といっても私も賢治の嫌いな食べ物知ってるわよ、きゅうりでしょ？」

「何だお前も覚えててくれたのか」
「自分から言い出したことだけど」
「なんかこついうの照れるな」

「いや、あらすじに書いてあるじゃない」

「……」

なんかこういうの悲しいな……

「しかし河童のくせにきゅうりが嫌いだなんて不思議ね」

「俺は河童じゃない！　つつか本気で首かしげるのやめろ！」

「でも昔本当に河童って呼ばれていたわよね」

「そっぴやそっぴや……、今思うと懐かしいけどあのときは結構嫌だったんだぜ？」

俺は小学生の頃泳ぎが得意だったってことで友達からはちよいちよい河童って呼ばれていた

良く考えるときゅうりが嫌いになった理由はここからきてるのかもしれない……

「賢治はあと人面エイリアンとも呼ばれていたわよね」

「呼ばれてねえわ！　勝手に俺の過去にトラウマ追加すんじゃないよ！」

「ちなみに私のあだ名はギガデストロイヤーだったわね」

「嘘つくんじゃないよ！　何で小学生のときのあだ名メタル。レイモンの必殺技なんだよ！」

「ところで賢治はその頃好きな子とかいたの？」

「いねえよ、大体俺の女友達がお前と明智さんぐらいだったのお前も知ってるだろ」

「ふーん」

「なんだよそれ……、そういうお前はどんなだよ」

「いなかったわよ、私だって男友達は賢治くらいだったし」

「そ、そうか……」

「なんか引つ掛かるなあ……」

「いな“かった”って」

「今はどうなんだ……？」

「もしかしてこいつ今は好きなやついるのか？」

「前もなんか告白されたい人がどうたらこうたらって言ってたし……」

「いや考え過ぎか……」

「でもなんかこいつからこういう話するなんて珍しいしなあ……」

「どうかしたの？」

「い、いや何でもない……」

「そう、じゃあこれから例えばの話をするわね」

「お、おう」

「例えばもし私が今好きな人がいるって言ったら賢治はどうする？」

「え？」

「やっぱいい！」

「こいつ今好きなやついるんだよ！」

「絶対そうだよ！」

「どうするの？」

「べ、別にどうもしねえよ……」

「……そう」

「何でそんなこと聞くんだよ、もしかしてお前今好きなやついるのか？」

「だ、だから例えばの話だって言ってるんでジンジャー！」

「絶対いるだろ！　だってお前テンパって語尾の“しょうが”の部分が“ジンジャー”になってるもん！」

「それはテンパったからではありません、うどんに若干しょうがの風味をきかせてねっていう意味も同時に伝えただけです」

「全然伝わらねえよ！」

「とにかくさっきのは例えばの話だから私に今好きな人はいません、あとそれ以上聞いてきやがったらH A H Kの原液を頭皮に塗りつけるから」

「何そのやばそうな名前の液体！？　……でもまあ分かったよ、今は聞くのやめとく、変に興奮してまた熱上がったたりされても困るしな」

「だからいないって言ってんでしょー！！」

そう言つと彩華は怒つて被っていた布団の中に潜り込んでしまった

……

……てかなんで怒るんだよ

「おーい、彩華さん？」

「……」

……はあ

……こついう子供っぽいところは昔と全然変わつてねえな

「……怒るなよ、好きなやつ聞いたただけだろ？」

すると彩華は布団を被つたまま話し始めた

「……別にそのことで怒つてゐるわけじゃないわよ」

「え？　じゃあ何で怒つてんだよ……」

「賢治が鈍感過ぎるのがむかつくから怒つてんのよ！」

「はあ？　どこが？　わけわかんねえよ……」

鈍感？

俺結構敏感な方だと思つただけだなあ……

「わけわかつてないところがすでに鈍感なのよ」

「ああもう分かつた分かつた、俺が悪かったです、謝るから機嫌直せ」

「謝れば許してもらえんと思つてるところがむかつく」

「じゃあどうすりゃいいんだよ……」

「うどん」

「ん？」

「すごくおいしいうどんを作ったら特別許してあげる」

はあ

なんていうか

こついうところも全然昔と変わってねえな

まあ

こついうところがこいつの良いところっていうか
憎めないところなんだけどさ

「了解」

そうして俺はうどんを作り始めた

ボールを取り返せ 前編

現在日曜日の午後1時

昼飯を食べ終え

俺がリビングのソファの上に寝転がっていると
突然すごい勢いで治が外から家に帰ってきた

「兄ちゃんやべえよ!」

「……何だよそんなに慌てて」

「2丁目公園で友達とキックベースしてたらボールが人んちに入っちゃったんだよ!」

「あらかわいそうに、謝るかばれないようにこっそり取りに行くしかねえな」

「こっそり取りに行くのは無理だよ、庭とかじゃなくて家の中に入っちゃったんだもん」

「……マジかよ、……てかそれ奇跡じゃねえか」

「頼む! 兄ちゃん一緒に来てくれ!」

「ええ?、やだよめんどくさい」

「頼むよ! 来てくれたらキックベースに混ぜてあげるから!」

「マジで! やったあ! なら行く!……ってなるわけわけねえだ

る！ 何が楽しくて小学生とキックベースしなきゃいけないんだよ！」

「頼むよお、一生のお願い！」

「ああ？ そんなにその家の人恐いのか？」

「うーんとねえ、何されるか分かんないから怖い」

「……なんだよそれ、チャイム鳴らして謝ってボール返してもらってそれで終わりだろ？ 簡単じゃねえかよ」

「その家にチャイムなんかねえよ」

「……今時チャイム無いなんて珍しいな、じゃあ扉叩いて『すいませーん！』て呼ぶしかねえな」

「その家に扉なんかねえよ」

「どんな家だよ！ チャイム無いぐらいならまだしも扉が無いって……、結構ヤバそうな家にボール放り込んじゃったなお前ら！」

「ホントにヤバそうなんだよ！ だからお願いします！」

「……ああもうしょうがねえな、特別だぞ」

「よっしゃああ！」

そうして俺たちはボールを返してもらったためにその家へと向かった

というわけでとりあえず2丁目公園前到着

「そんでその家どこにあるんだ」

俺が治にそう聞くと

治は無言で公園の方を指差した

「おいおいまさか公園の中に家があるとか言うんじゃない……」

そのまさかだった……

公園の

しかもド真ん中に家があった……

いや

家というか

テントが一つポツンとあった……

「……あのもしかしてお前が言ってる家ってあのテント？」

「うん」

治は超無表情で頷いた……

確かに

チャイムも無ければ扉もない
なるほどそういうことだったのか！

……って

「あれ確実にホームレスの家だろ……」

「うん」

「うんじゃねえよ！ てかド真ん中にテント立ってんのに良くお前からこの公園で遊ぼうと思ったな！」

「だってそのせいで遊ばなかったら俺たちがあのテントに負けたみたいになっちゃうじゃん」

「その強気ボール取りに行くときにも発動しろよ！ つつかお前の友達どこ行っただよ！」

「俺合わせて14人で遊んでただけど、ボールがテントに入った瞬間俺以外のやつ全員『あつ！ 今日塾あんの忘れてた！ というわけで！』って言って帰っちゃった」

「それ絶対嘘だわ！ お前はめられたんだよ！」

「まじで！？」

そんな都合良くみんな塾あるわけねえだろ……

「てかそのボール誰のなんだよ」

「公園の茂みで拾ったボールだから誰のでもないよ」

「何だよ、それなら諦めろ、俺はホームレスとかそういうのめっちゃくちゃ苦手なんだよ」

「諦めるのは絶対に無理だ」

「何だよ！　誰かが損するわけじゃねえんだからいいだよ！」

「兄ちゃんは目の前のことから逃げる人間を彩華さんが好きになつてくれると思うか？」

「だからそういう気持ちがあるなら一人で行けつつの！！」

「もしホームレスの人に俺が殺されたらどうすんだよ！」

「だから諦めろって言ってるんだよ！！」

「諦めたらそこで試合終了ですよってかの有名なあの人も言うた
だろ！」

「それで殺されちまったらそれこそ試合終了になっちまうだろうが
！」

とそんなことをでっかい声で話していると
突然珍しい人が俺に話しかけてきた

「お、君は多日咲賢治くんではないか」

「あ、安早市さん」

なんと俺と治の前に登場したのは
ジャージ姿（恐らくランニングでもしていたのであろう）の安早市
勇姫さんだった

「黙れ」

「え、あ」

安早市さんが名字で呼ばれるのと敬語で話されるのを嫌いなことすっかり忘れてた……

「言っておくが君が忘れてるのはそれだけではないぞ」

「ああそうだったな……」

この人は読心術も使えるんです……

「ところで隣にいる見た感じ小学生のその子は君の隠し子か？」

「んなわけねえだろ！ 弟で……だよ！」

「すげえ仲良いわけじゃないのにいきなりタメ語ってすげえやりにくいな……」

「初めまして多日咲治です」

そして治は軽くお辞儀した

「おお、弟だったのか！ これはびっくりびっくり！」

「あんたの発言の方が百倍ビックリだわ……、ってか敬語で話されるの嫌いなんじゃないかねえのか？」

「年下の者が年上の者に敬語を使うのは当たり前のことだろ」

「そこはまともな考えなんだな……、ところで今日部活は？」

「もちろんあるぞ、ちなみに今はロードワーク中だ、しかし君たちもキックベースしているときにボールがホームレスの家に入ってしまった、それを取りに行かなくてはいけないなんて大変だな」

「勝手に人の心読むなよ……」

まあ説明しなくて済むから楽だけどさ……

「しょうがない、ここは私が一肌脱ごうではないか」

「え、いやいいですよ！ それで怪我でもされたら大変ですし」

「黙れ」

「お、おうっ……」

この人やりずれえ……

「……ええと、いやいいよ、それで怪我でもしたら大変だし」

「誰も私が行くとは言っていないだろう」

「え？」

「警察に連絡すればすぐだ！」

「……いやいやいやいやいやいやいや
「……いやいやいやいやいやいやいや」

俺と治の声がシンクロした……

「確かにそうだけどそこまで大事にしなくていいよ……」

「……そうか、力になれなくてすまないな」

「別にいいよ、それより部活中なんだろう？」

「そうだった！ しかも制限時間以内に戻らないとペナルティがあるのをすっかり忘れていた！」

「あははそれは大変だな、どんなペナルティなんだ？」

「桃子を背負ってグラウンドをうさぎ跳びで50周だ」

「お、おうっ……」

多分俺なら背負うことも無理だな……

「それでは失礼する！」

「ああ、またな」

そして安早市さんはすごい勢いでその場から去っていった……

「……何か台風みたいな人だね」

「……そうだな」

ボールを取り返せ 後編

今だに行くかどうか決められずにいる俺と治

何度近所のおばさんに変な目で見られたことが……

もう治あきらめてくれよ……

絶対ホームレスとかめんどくさいことになるって……

「あのように、ボールなんて今度買ってやるからあきらめろよ……」

「だから何度も言っただろ！ そんな男を彩華さんが好きになっ
てくれると思いますか？」

「何でお前そんな生意気なんだよ！」

「頼むよお！ 一生のお願いだよお！ 一緒についてきてくれよお
！」

てかそんなうじうじしてる人間のことも彩華が好きになるとは思わ
ないけどな……

つつても治一人に行かせるのも危険だよなあ……

治もボールあきらめそうにないし……

あーめんどくせえなあ！

「じゃあこうしよう、ジャンケンでお前が勝ったら俺も一緒に取り
に行つてやる、けどもし俺が勝ったらお前にはボールをあきらめ
てもらわうからな」

「うーんまあしょうがない、いいぜ！」

「よしじゃあいくぞ、最初はグー！ ジャンケンポン！」

そうしてお互い右手を力強く前に出した
そんでもって結果は……

「やべ……」

「はあ！ さすが兄ちゃん！ ジャンケン弱いな！」

俺がグー

治がパーを出し

俺が見事に負けた……

「こういうときに兄ちゃんはいつもグーを出すんだよ、まったく弟に癖を見抜かれるなんて兄ちゃんもまだまだだな！」

「くそお……それ分かったからあっさり受けたんだな……」

「その通り！」

うわあ……

やっちゃったあ……

まあしょうがねえか……

約束は約束だしな

「よし！ じゃあ兄ちゃん行つてらっしゃい」

「うん行つてくる、……って何だよ！-！」

こいつまじで頭ぶん殴つてやろうか……

「何が？」

「いやいやいやいや……、お前もくるんだよ！！」

「うわっ！！ 助けてええ！」

そして俺は無理やり治を引っ張りながら
遂に公園へと足を踏み入れた……

「ところでお前らこの公園で良く遊んだよな？」

俺は治を引っ張りながらそう質問した

「ああ遊ぶよ、ちなみに昨日も遊んだぜ」

「昨日はこのテント無かったのか？」

「そっぴや昨日遊んだときはなかったな」

「てことはこれ新築じゃねえかよ……」

やべえ空気がプンプンするぜ……

「兄ちゃん別にそこまで不安がらなくてもいいんじゃないか？
にまだホームレスと決まったわけじゃないんだし」
別

「まあそうだな、見かけだけで判断しちゃいけないよな」

そして俺たちはテントの前に到着した

「そんじゃまあ軽くあやまってちゃっちゃんと帰りますか」

「そうだな」

「すいませーん、先ほどボールが飛んできたと思うんですが……」

そう俺がテントの入り口部分をめくって中を覗くと

そこには信じられない光景があった……

なんと

中ではスーツを着た男が横になって超くつろぎながらテレビを見ていた……

そして俺はめくっていた入り口部分をそっと閉じた……

「なあ治」

「うん？」

「今テントの中見たか？」

「うん」

「そうか」

「うん」

「じゃあ帰るか」

「うん」

そして俺たちは家に帰るため歩み始めた……

「ちよつとちよつと！ いきなし人んち覗いて、そんでもって何も言わずにそのまま帰るなんてちよつと失礼じゃない？」

だよなあ……

そうなるよなあ……

簡単に帰らせてくれるわけないよなあ……

「すみません……ちよつとびっくりしちゃって……、なあ治？　つてあれ……」

さっきまで俺に後ろにいたはずの治がどこにもいない……

「ああ弟くん？　ならすごい勢いでどっか行っちゃったよ」

「……」

あいつ逃げやがったあああ！……！！……！！

「まあとりあえずうちにあがりなよ、お茶出すから」

「いや……あのボールだけ返してもらえれば……」

「まあとりあえずうちにあがりなよ、お茶出すから」

「はい……お邪魔します……」

何を言っても同じことしか言ってくれそうになかったので仕方なくお邪魔することにした……

「まあ好きなところに座ってよ」

「はい……」

「いやいやあ、まさかお客さんがくるとは思ってもいなかったからさあ、たいしたお菓子ないけど許してね」

「いや、お気づかいなく……」

何でこんなことになってんだよ……

つうかこのツツコミどころ満載の家はなんだ！

テレビはあるし（しかも地デジ対応の超薄型……）パソコンはあるし
おまけに冷蔵庫や洗濯機やキッチンもある……

てかどつから電気持ってきてんだよ！

あんたホームレスのくせに何充実した生活送ってんだよ！

とツツコミたい！

ツツコミた過ぎてじんましん出そう！！

「……あの一つ聞いてもいいですか？」

「いいよお、一つといわず何でも聞いてよ」

「……あなたはホームレス何ですか？」

「まあそうだね、といっても無職で全然仕事がないとかそういうわけじゃないよ」

「え？　じゃあなんで普通の家に住まないんですか？」

「いや実は今結構やばそうな連中に追われててさあ、前住んでた家燃やされちゃったんだよねえ、だから今はそいつらから逃げながらホームレス生活をしてるんだよアハハ」

「……」

笑いごとじゃねええ！！！！

つつか関わったら絶対ダメの種族に分類される人と関わっちゃったよ！！

「……じゃあ俺そろそろ帰ります」

「まあまあ、もうちょっとくつろいでいきなよ」

「いや……ホントもう大丈夫なんで……」

「まあまあ、もうちょっとくつろいでいきなよ」

「はい……そうします……」

この人すげえ怖いよ！

めちやくちや顔ニコニコしてるけど絶対なんかすげえこと考えてるよ！

「おっと、そういえば自己紹介がまだだったね」

「………そういえばそうですね」

「僕の名前は神ヶ島修平、かみがしましゅうへい長くて覚えづらい名前でごめんね、ちなみに周りからは神とかゴットとかサタンとか呼ばれてるよ、君も好きに呼んでいいからね」

「何だそのいかにもやばそうなあだ名！」

ツツコンでしまった……

「君は確か多日咲賢治くんだよね？」

「え？」

何で知ってたんだよ……

……もしかしてこの人も読心術使えるのか？

「な、何で知ってるんですか？」

「僕をなめてもらっちゃ困るよ、正直僕は興味を持った物や人のことなら何でも知ってる自信があるよ」

「興味を持った物や人って……」

じゃあ俺に出会う前から俺のこと知ってたってことだよ……

ますます怖いよこの人！

てかもう名前とかばれちゃったよ！

どうしよう……

「ちなみにはれてるのは名前だけじゃないよ、君の家族構成や君の友人関係、そして君の幼馴染、確か名前は長田彩華ちゃんだっけ？その子の過去なんか僕は知っている」

「ふざけんな、どういうことだよ」

いきなり口が悪くなってしまったが別に後悔はしてない

何故なら俺は触れては欲しくないことをこの人に触れられたからだ

「どうしたんだい、急に？」

「どうしたんだいじゃねえよ、何でここで彩華の名前がでてくんだよ」

「いやいや、まさかそこまで食いついてくるなんてねえ、さっきまでの帰リたそうな顔がまるでなかったかのようだよ」

「いいから質問に答えろ」

「だからさっきもいっただろう？ 僕は興味を持った物や人のことなら何でも知ってる自信があるってさあ、ただ単に彼女も僕が興味を持った人間の一人だというだけだよ」

「あんたは彩華や俺の何に興味があるんだ」

「うーん、まあ君は全部だよ、そんでもって彼女は過去かな」

この男

神ヶ島修平はずっと変わらず気持ち悪いぐらいのニコニコ顔をしている

「彩華の過去？」

「そうだよ、実は君を今日うちに招き入れた理由もそこにある、まあボールが丁度うちに入ってくるっていうちょとした奇跡もあったけどね」

何だ？

何を言ってるんだこの人は？

俺はただ治に頼まれてボールを取りに来ただけだぞ？

なのになんでこんな話になってるんだ？

「もともとあんたは俺と話す機会が欲しかったってことか？」

「その通り、じゃあまあ本題に入ろうかな」

その場の空気がぞつと重くなった

「長田彩華ちゃんには中々悲惨な過去があるよねえ？ 僕もある程度は調べたんだよ、でももちろん僕は彼女とずっと一緒に過ごしていたわけではないからねえ、詳しいところは全然分からないんだ、そこで僕は考えた幼馴染である君なら彼女の過去を詳しく知ってるんじゃないか、ってね」

「それであんたは何が言いたいんだ？」

「僕に情報を売ってくれないかなあ？」

俺は両手の拳を強く握り締めた

「こつ見えても中々金には余裕があるんだ、いくらなら売ってくれる？」

「ふざけんな……」

「それにしても彼女は良くあんなに明るくしていられるねえ？ 普通だったら立ち直れないと思うよ？ 下手すれば自殺したりしちゃうよね？」

「ふざけんじゃねえよ！！！」

俺は思いつきり右の拳で彼の顔を殴った

我慢の限界だった

自分のことを何と言われようが

何をされようが

大体のことは許せる

ただ

彩華のことだけは別だ

特に俺は彩華の過去について触れられることが何よりも嫌いだ

「1億だろうが1兆だろうが払われても俺は絶対に売ったりしねえ、大体情報って何だ？ 彩華の過去はどんなに悲惨だろうが大切な一つの過去なんだよ！ 思い出なんだよ！ それを情報なんていう軽々しい言葉で表すんじゃないやねえよ！！！」

こんなでかい声を出したのは初めてな気がする
というか初めてだ

すると神ヶ島修平は俺に殴られた顔を押さえながら起き上がると突然口を開いた

「いい！ いいよ！ さすがだ！ さすがこの僕が興味を持った人

間の一人だ！　すばらしいよ！　まさに幸せとはこういうことだよ！　アハハ！　僕は間違っていなかったんだ！」

だめだ

状況が理解できない……

俺は無我夢中に怒りを爆発させた

なのに神ヶ島さんはそれをめちゃくちやうれしそうにしている……

何だ？

ヤバイぞ……

本気で気持ち悪い……

「何言つてんだよあんた……てか何殴られて幸せになってんだよ……気持ち悪いわ」

「いやいや僕は気持ちがとても良いよ！　だって君は僕に対して予想していたことよりもさらに上に行く受け答えをしてくれたんだから！」

「……受け答え？」

「うん、君が断ることぐらい初めから分かっていたよ、ただまさかあそこまで熱くなるとはねえ、おかげでまた新しいことを知ることができたよ！　アハハ！」

「ええと……はあ？」

ヤバイよこの人……

絶対ヤバイよ！！

「僕は君と彩華ちゃんの関係が一番興味あるんだよ、だからちよっ

とからかつちゃったけど、実際は全部本気じゃないから安心して、彼女の過去についても触れる気は全然ないから」

「なにい！ ふざけんのもいい加減にしろや！！」

ようするにそれって俺が遊ばれたってことじゃねえか……
あんなに本気でキレたのばかりじゃないじゃねえか……

「いやあ、ごめんごめん最近暇でしょうがないんだよね、アハハ！」

「アハハじゃねえよ！ でも冗談だろうが彩華の過去のことあーだこーだ言ったことは許さねえからな！」

「ホント君は彩華ちゃんのことを大事なんだね」

「ち、ちげえよ！ そういうわけじゃねえよ！」

「アハハ！ 顔真つ赤だよ賢治くん！」

「からかうのもいい加減にしろおおー！」

そして俺はもう一発彼の顔を殴った
まあ今度は軽めだけど……

「いたいなあもう、腫れちゃうじゃないか」

「うるさい！ さつさとボールを渡せ！ 俺はもう帰る！」

「何だあ、もう帰っちゃうのか、つまんないなあ」

「いいからボール返せ！」

「はい」

そして神ヶ島さんは俺にボール投げ渡してきた

「まあまた遊びにおいでよ」

「い・や・だ！」

「そつかあ、でもどうしようもなくなってしまったときとかは遠慮なく僕を頼ってね、力になれると思うから」

「ふん、やなことだ」

「あつれひどいな」

そんなこんなで俺とこの神ヶ島さんの長い会話は終わり
俺は家へと帰った

なんつうか今日は今までで一番体力を使った気がする……

眠いの眠れない

人間というものはつくづくよく分からん生き物だ

まあ俺もその人間の一人なのだが

今日ほどこう思ったことはない

人間にとって睡眠は必要不可欠だ

ずっと眠らなければ人はいつか死んでしまう

ただみなさんご存じの通り人間は眠くなければ眠ることはできない

みなさんも楽しみみな遠足の前の日やクリスマスの前の日など

興奮して眠れなかったという経験があるはずだ

俺だってそうだった

じゃあことういうのはどうだと思う？

眠くてたまらないのに眠れない

こんなことみなさんはあると思いますか？

そんなこと絶対あるはずはない

みなさんそう思うだろ？

俺だって今日までずっとそう思っていた

だけど

それがあるんだよ

だって今俺がその状況に直面してるんだもん……

だいたい

睡魔というものは何を考えているんだ？

俺を眠くさせておいて

いつも起きてたいときに限って攻撃してくるくせに……

素直に床についてやれば何故か攻撃をやめやがる……

どういうことだよ！

眠らせたいなら素直に眠らせろや！

何で眠いのになんかに眠れねえんだよ！
おかしいだろ！

俺どんだけ今日疲れたと思ってんだよ！
ああもういいや……
こんなこと考えててもどうせ眠れないし……

「丁度いいし勉強でもするか」

そう俺はひとりごとを言いながら部屋の明かりをつけ
そのまま自分の机に向かった

「英語の予習でもやつとくかな、また宮本先生に激ムズな問題答え
させられそうだし、ていうか明日絶対あてられるな……」

俺だけ激ムズテスト事件以降（事件とか大袈裟だけど……）
腹いせなのか宮本先生は俺ばかり難しいところをあてるようにな
りやがった……

てか考えてみればこれイジメじゃん！
絶対いつか教育委員会に訴えてやる！

「よし、じゃあ勉強はじ……」

と俺が今まさに勉強を始めようとした丁度その瞬間である
また睡魔の野郎が俺に攻撃してきやがった……

「……まったくホントタイミング悪いなあ」

まあ何はともあれこれで眠れる
仕方なく出した英語の教材を元の場所に戻し
部屋の明かりを消し

もういちど俺は床についた

それから30分後

一番最初に床についた時から約3時間後の12時

俺はいまだに寝つけずにいた……

また目が覚めてしまったのだ

眠ろうとすれば目が覚めて

仕方なく起きようとすれば今度は眠くなる

みなさんこんなこと経験したことあります？

ないでしょ？

多分ここまで睡魔にいじめられたの俺が世界で初めてだよ！

神様教えてください

これはいったい誰の策略ですか？

神様は私がお嫌いですか？

俺はこのまま一生眠ることができないんですか？

お願いだから……

「さっさと教えろやああ！！！！！！！！」

と俺が枕に口を押しつけた状態で叫ぶと

突然枕元にある俺の携帯がブーブー喚き始めた

「誰だよこんな夜遅くに！」

そう携帯を開くと

画面には長田彩華と書いてあった……

「……」

スルーしよう……

だって無理だもん！

あいつこんな時間でも平気でうちにきなさいとか言うからね？
へたすりゃいたずら電話の可能性もあるからね？

しかし彩華は全然電話を切ろうとはしない……

それどころが家の電話にまで電話かけてきてる……

このままじゃ家にいるマイファミリーが全員起きてしまう……

仕方ないので俺は電話にでることにした……

「なんだよこんな時間に！」

「賢治今すぐうちにきなさい！」

やっぱりいい……！

ホントそこだけは期待を裏切って欲しかった……

「なんでだよ！ 無理に決まってんだろ！」

「……いいから早く来て！ お願いだから……」

「だから無理だって！ 今何時だと思ってるんだよ！」

「グスツ……、いいから来てよ……」

「お、おい……、ちょっと待て……」

何でだろうか
いきなり彩華が
泣き始めた……

「……」

「……おい、……何でお前泣いてんだよ」

「……泣いてない！」

「……泣いてんだろ、……いったい何があったんだ？」

「……でたの」

「はあ？ お前この年になってオバケとか言うんじゃないやねえよな？」

「違うわよ！ ゴキブリよゴキブリ！」

「……」

そっぴや忘れてた……

こいつめちゃうくちゃゴキブリ嫌いだったんだっけ……

「お前まだゴキブリ嫌いだったんだな……」

「当たり前じゃない！ 賢治だって私がゴキブリをアンガールズ田中の次に嫌いだということ知ってるでしょ！」

「知らねえよ！ お前がアンガールズ田中が嫌いなことは初耳だわ！」

「いいから早く来てよ！ このままじゃ私眠れないじゃない！」

「殺虫剤でもぶっかければいいだろ……」

「それは無理！」

「何でだよ！」

「だってこのゴキブリ私に使わせないよう殺虫剤の周りグルグルまわってるんだもん！」

「そのゴキブリ頭良！！」

「だから早く来て！ 来ないと本気でH A H Kの原液頭皮に塗りつけるわよ！」

「だからそれ何！？ 一体何の液体なの！？」

「H（早く）A（頭）H（禿げる）K（薬）に決まってるじゃない！」

「怖！ めちゃくちゃ怖いわその薬！」

「だから絶対来てね！ ブツツ……」

「……」

はあ……

俺なんか最近彩華にこき使われてばっかな気がする……

そして俺は渋谷彩華の家に向かった……

G o t o t h e S a i k a ' s h o u s e .

ゴキブリ出ただか何だかのせいで12時過ぎにもかかわらず家に来いと言われてしまった俺は適当に着替えて適当に家族に気づかれなように家を出た。

「はぁ……」

さつきから俺の携帯がめっちゃブルブル言ってる
恐らく彩華が連続で電話をかけてきているのだろう
まったくよお……
少しぐらい待つことを覚えなさいよ……

「しつけないなあ！ 今向かってるつつつの！」

「遅い！ 超遅い！ もうかれこれ10分は経ってるわよ！ ゴキブリが増殖したらどうするのよ！」

「そんな早く増えねえだろ！ ……てか1匹いたら30匹はいるって言うから元からたくさんいるんじゃないかねえか」

「……」

「おい？ 彩華さん？ おーい」

いきなり黙りこきやがった……
やべえ余計なこと言っちゃったかな……
シヨツクのあまり気絶でもしたか？
それともまた泣いちゃったか？

「今Amazonで火炎放射器を注文したわ」

「待てーい！！ 早まるな！ てかAmazonで火炎放射器買えるの！？」

こいつテンパリ過ぎて思考回路がおかしくなつてやがる……

「なんか今ならなんでも出来る気がしてきたわ」

「落ち着け！ それじゃあゴキブリの思うツボだぞ！」

俺も何言つてんだろう……

「今なら一人で30人31脚に出れる気がするわ」

「無理や！ それだけは絶対に無理や！」

「今なら黒豆を箸でつまめる気がするわ」

「なんかしょぼ！ てかつかめたところであまりうれしくない！」

「今ならジャイ子の本名が分かる気がするわ」

「えっ何？ めっちゃ気になるんだけど！」

「今なら」

「もういいわ！ お前何回ボケんだよ！」

「何よ！ そっちだって楽しそうにツツコンでたくせに！」

「別に楽しそうにしてねえよ！」

「嘘よ！ だって賢治ツツコむたびに小さい声で「ぐへっ！ ぐへへ！」って言ってたじゃない！」

「適当なこと言ってんじゃねえよ！ それただの変態野郎じゃねえか！」

「何言ってるの？ 賢治は変態野郎じゃない」

「ちげえよ！ お前今から助けてもらう相手によくそんな暴言が言えたもんだな！」

「逆に言うとかつて戦国最強と言われた私に対してよくそんな反論できるわね？」

「なんで戦国時代を1秒も生きてないお前が戦国最強になれるんだよ！」

「はい今小さい声で「ぐへへ！」って言ったー」

「言ってねえよー！！！」

だめだ彩華のペースに完全にのまれてる……

「まあとりあえず今向かってるからな、そんじゃ電話切るぞ」

「だめよ」

「なんでだよ！　ちゃんと今向かってるんだからいいだよ！」

「そんなの信じられないわ、とにかく電話を切ったら賢治の首を切るから」

「……」

こいつ多分今電話の前でめっちゃドヤ顔してるだろうな……

「言っとくけどドヤ顔なんてしてないから」

「……」

なんで俺の考えてること分かんだよ……

「……そんで今のゴキブリの状況は？」

「もう見失っちゃったわよ！」

「はあ？　無駄なボケかましてるからそういうことになるんだよ！」

「私は悪くないわ、賢治が全部悪いのよ」

「おかしいだろ！　探す手間ぐらいはぶかせろや！」

「うるさいわねえ！　こんなキモグロで賢治似な生物をずっと目で追わなくちゃいけない人間がどれだけつらいか賢治には分からないのよ！」

「賢治似ってどういうことだよ！ てかお前の意見なんて知らねえよ！」

「もうごちゃごちゃ言ってる次賢治んちにアナコンダが出てきたとき助けてあげないわよ！」

「そんなもん出ねえよ！ てか前にも出たことがある的に話すんじやねえよ！」

「知らないの？ 賢治んちはう。こくさいって県内で有名なのよ？」

「アナコンダ関係なっ！ てか県内ってどんだけ有名なんだよ！」

「そろそろ全国チェーンにしてもいい頃じゃない？」

「分けてわかんねえわ！！」

「突然だけどダジャレを思いついたから言っわね」

「……はあ？」

「このあたりめうめえなあ、そんなのあたりめえだろ」

「……」

ホント突然過ぎてついていけないんですけど……
俺にどうリアクションしろと……？

「笑いなさいよ」

「……あはははは」

「賢治の笑い方キモいわね」

「……」

「……こいつなんでこんな簡単に悪口が言えるの？」

彩華に子供ができたらすさまじい子になるだろうな……

「でもどうしてあたりめってあたりめって言うのかしら？」

「それは、昔するめってのはお供えものとかに使われてて、“する”ってのはお金をするとかの意味で縁起が悪かったから、良い意味でとらえられる“あたり”を“する”と交換しようってことになり名前が“あたりめ”になったんだよ」

「何？ 自慢ですか？ 俺はこんなことまで知ってるんですよっていう自慢なんですか？」

「お前が聞いてきたから答えてやったんだろっが！」

「つまらないわ！ せっかく私がおもしろいこと言おうと思ったのに！」

「知らねえよ……」

「じゃあなんでいかくんがいかくんって言うか分かる？」

「そりゃただ単にいかのくんせい略だろ」

「ちがうわ、「まさかいかごときに我が国を制圧されるとは……不覚であつた……」「ごめんねよしおくん……」の略よ」

「何そのストーリー！？ てかよしおに話しかけたやつ何したの！？」

「よしおが大事にしていた木彫りの熊の持っているサケをイワシに換えちゃったのよ」

「しょうもな！ てか謝るタイミング間違ひ過ぎだろ！ ……っていつまでよしおの話続くんだ？」

「私はさつさとやめようと思ったのに賢治がツッコむから長くなっちゃったんじゃない」

「なんで何かと俺のせいなんだよ……」

てかこいつ絶対ゴキブリのこと忘れてるだろ……

「忘れてないわよ」

「だからなんで俺が考えてること分かんのか？ お前も読心術使えんの！？」

そんなこんなでとりあえず俺は彩華の住むアパートの前に到着した
現在時刻は大体12時半

俺今朝までに家帰れるかな……

「それにしてもゴキブリだけは無理だわ……今結構リアルな感じで早く来て欲しいんですけど……」

「分かった分かった、今お前んちの前に着いたから安心しろ、てか何でお前そんなにゴキブリ嫌いになったんだっけ？」

「何？ あんなにも恐ろしい事件を忘れたの？」

「事件？」

「そうよ事件よ！ Kかと思いきやGでした事件よ！ 本当に忘れたの？」

「…… Kかと思いきやGでした事件？ …… ああ…… 思い出したわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3638s/>

BUSY

2011年7月21日23時43分発行